

酒田市立光丘文庫蔵 『物種真考記』 翻刻

(翻刻／網野 可苗)

〔外題〕 物草真孝記 一(一〇十) (後補書題簽、本文と別筆、卷一・六題簽欠)

〔内題〕 物種真考記 第一(一〇十)

〔刊写〕 写 (同筆)

〔数量〕 一〇卷一〇冊

〔形式〕 縦22・横15.5cm

〔作者〕 不明

〔序跋〕 なし

〔蔵書印〕 三種(光丘文庫、太田宣賢寄贈、貸本屋か)

(1 1才)

物種真考記 惣目録

第壹

一 徳川上総介忠輝「たゝてる」公御鷹狩「たかかり」の事

并 佐々木内膳「ないせん」恥辱「ちじよく」の事

第貳

一 物種「ものぐさ」太郎利休「としやす」が事

并 不破「ふわ」万左衛門不覚「ふかく」の事

(1 1ウ)

一 物種太郎芦屋方「あしやかた」へ討手の事

并 佐々木善遠「ささきよしとふ」手がらの事

第三

一 不破万左衛門物種を欺「あさむ」く事

并 佐々木内膳ゆう気の事

一 徳川上総介殿関「せき」が原出陣の事

(1 2才)

并 不破悪計「あつけい」百性「せう」一揆「き」の事

第四

一 佐々木内膳一揆「き」を鎮「しつめ」る事

并 不破鉄砲「てつぱう」にて内膳を討「うつ」事

一 一揆百性四人疑「うたかい」を蒙「かうむ」り死刑「しけい」の事

并 中瀬村「せむら」助六孝心「かうしん」の事

(1 2ウ)

第五

- 一 助六平等「へうとう」の森「もり」にて玉葉を拾「ひろ」ふ事
并 不破陰謀露頭「いんほうろけん」ちく天の事
- 一 物種新左衛門矢野内匠「やのたくみ」切腹「せつぷく」の事
并 佐々木甚蔵敵討「かたきうち」に出立の事

第六

- (1 3才)
- 一 物種が母貞義「ていぎ」を守「まもり」自殺「じさつ」の事
并 太郎敵討を願出立の事

- 一 忠輝公仁心物種出立の事

- 并 不破万左衛門改名「かいめい」立身の事

第七

- 一 佐々木主従「しうく」大坂にて敵を尋る事

(1 3ウ)

- 并 不破宗兵衛人違「ちか」ひの事
- 一 物種太郎京都へ旅行「りよかう」の事
并 大津の宿屋にて盗人「ぬすひと」を方便「たはか」る事

第八

- 一 物種太郎東坂本「さかもと」に閑居「かんきよ」の事
并 北野絵馬堂「ゑまどう」にて甚蔵に対面「たいめん」の事

(1 4才)

- 一 千宗三芦屋釜「あしやかま」拝借「はいしゃく」の事
并 宗三岩倉「いはくら」了輔を欺「あさむ」く事

第九

- 一 不破万左衛門京都を立退「たちのく」か事
并 不破宇治榎「まき」の嶋「しま」に隠「かく」るゝ事
- 一 佐々木物種宇治順見「しゆんけん」の事
并 下人岡平「おかへい」不破を見付る事

(1 4ウ)

第十

- 一 真杵「ますぎ」弥平治岡平「おかへい」に殺「ころ」るゝ事
并 物種不破を生捕「いけとる」る事
- 一 物種佐々木敵討「かたきうち」の事
并 宇治通圓「つうゑん」茶屋「ちや」の事

(1 5才)

物種真考記 第壹

徳川上総介御鷹野「たかの」の事

并 佐々木義遠「よしとふ」恥辱の事

桃李「とうり」不言春幾暮「いくはくくれ」煙霞「ゑんか」無レ跡昔誰「むかしたれか」
栖「すみか」とし管「くはん」三位の詩「し」宜なるかなこゝに

越後国みしま郡与板「よいた」の領主徳川

上総介越後中将源の忠輝「たゝてる」公と

申ける神君「しんくん」第九の御男にて渡「わた」

(1 5ウ)

らせ給ひ剛氣「かうき」たん慮「りよ」の君にてぞ

有ける元来に鷹「たか」がりをこのみ給ひ

毎度近習「きんしゆ」子性をわづか随へられ

自「みづ」から山野に遊び御なぐさみとし

給ひけり此は慶「けう」長元年春三月

たか野の催「もよふ」し有領内の交野「かたの」に出給ひ

鷹「たか」をつかひ給へば近習子性「こせう」十五六人

みな殿と一やふに装束「せうそく」し春の野辺「のべ」

に遊びふし霞「かすみ」をわけつゆをふみ

(1 6オ)

雁「がん」かも田鶴「たつる」に至る迄たかに取せて

楽として悦ひ給ひし折からに春

を見捨てゝいぬ雁「かり」の五六羽「は」ならひ

ゆくを忠輝「たゝてる」公きつと見給ひあれ射「い」

て落「おと」せと下知し給へばかしま

つて候と不破万左衛門庸茂「つねしげ」弓矢

をつがふて立向ふが佐々木内膳「ないせん」

義遠「よしとふ」いや某が仕り日比「ひころ」の射術「しやじつ」を

見せ申さんと庸茂よりも先へ

(1 6ウ)

たちけるにいかゞしけん義遠「よしとふ」が

はなつ矢「や」かりに当らずして庸「つね」

茂「しげ」が矢は鷹「かり」の真中「たゝなか」射通「いとふ」し

かつはと地にぞ落「おち」にけり不破

万左衛門はすぐに射取し雁「かり」を取て

忠輝「たゝてる」公の御前にさし上げれば佐

々木内膳は面目「めんほく」をうしなひ顔「かを」を

あかめて叩へける不破万左衛門は打
笑「わら」ひていにしへの場由「ようゆう」は夜「よ」に雁「かり」

(1 7才)

の聲「こへ」を聞いても射て落「おと」したりと
きけり何条晝「ひる」飛「とぶ」かりを射て落
したりとてあながちにこうとするに
あらずと言下に義遠「よしとう」を恥「はじ」しめける
忠輝公大きにせうじ給ひ日比「ひころ」
たしなむ射けいの程かんずるにたへ
たりとしきりに不破を賞じ給ひ
且又佐々木内膳を呼「よん」で大きに怒「いか」
らせ給ひ汝じ無用の大言を放ち

(1 7ウ)

鷹を射そんじあながち恥辱「ちじょく」とも
おもわず指ひかへし体の奇怪さよ
是より我目通りへ出る事あとふま
じ汝「なん」じごとき者は家中の見せ
しめと思ひ知れやと扇「おふぎ」子を取て打「ちう」
擲「ちやく」し給ひ此席「せき」には叶わじとて
狩「かり」ばより追「おい」返「かへ」されける内膳は日
比覚へし弓矢の達「たつ」人ゆへよもや
射損「いそん」ずる事はあらじと思ひの外

(1 8才)

鷹「かり」を射「い」そんじ不破にてふかふせら
れ殿には諸士の中にて打擲「ちうちやく」骨髓「こつゝひ」
にてつし切腹「せつぷく」せんには然じと思ひ
をきわめて我家に帰りけり扱又
徳川上総介どのは日も夕陽「せきよふ」にかたぶく
比まで鷹「たか」をつかふて遊び給ひ其後
御帰城なされける佐々木内膳はわが
家へかへりて其まゝ仏間「ふつま」へ入短刀「たんとぶ」
をもち先祖「ぞ」の霊「れひ」をまつり胸「むね」を

(1 8ウ)

くつろけ唱名「せうめう」をなして合掌「かつしよう」
して申けるは拙「つたな」くも義遠「よしとう」武
門の家に生「うま」れて数度の合せんに

ちじよくを取ず先鋒「ほう」の士に加へ
られいさゝかも武功の誉「ほま」れ有し身の
けふのちじよくを蒙「かうむ」り一家中に
面「おもて」を合し候わんやと先祖「ぞ」への申訳「わけ」
にたゞ今切腹「せつぷく」仕相果「はて」頓「やか」て未来「みらい」に
て先祖の親ぞくに對面「たいめん」致して

(1 9才)

つまびらかに申上候わんとて刀「かたな」をとり
直しすでに腹「はら」に突「つき」立んとす然る
に一間より私しのちじよくに忠義を
わすれ大死「いぬし」にし給ふ事なかれと呼「よは」は
る者あり義遠おどろき是を見れば
襖「ふすま」をひらき立出るは桃生元昌「もとうげんせう」とて
義遠が朋友「ほうゆう」の医師「いし」なり義遠あざ
笑ひて其許達「もとたち」の知る事にあらず
日比「ひごろ」朋友の信あらばいさぎよく

(1 9ウ)

我が介錯「かいしゃく」をせよかならず死をとめること
なかれ元昌「けんしよふ」申けるは我まつたく
其方が生害「せうかい」をとゞむるにあらず尋
る事あり暫「しはら」く生がひをとゞまり
我いふ事を聞べし食「しょく」を食「くら」ふ者
は其器「き」を損「そん」せずといふ事ありなん
じ今迄主君「しゆくん」の禄「ろく」を受て一命を
つなぐは主君は何のためにやし
のふぞや合戦の時に敵「てき」をふせぎ

(1 10才)

敵をやふらん為ならずや何条いさ
さかの事を怒「いか」りいきどふりして
一命を失ふ時は主人の為敵を
やぶり敵を防「ふせ」ぐ命はいづれの
体をもつて致すぞや此義を我
に答へて後死しても忠義に成と
いふ事あらずいかにも切腹せよ我
も朋友のよしみに介錯「かいしゃく」いたし
くれんと申ければ内膳是を聞て

(1 10ウ)

まことに汝がいふ処一理ありとわいひ
ながら死すべき時に死せざれば
死に勝「まさ」るはじあらし殿の御打
擲尤ともなれども不破がわれを
軽「かる」しめ揚由「ようゆう」が鷹「かり」を射しか
よる聲「こゝ」を聞て射「い」おとしたり
何ぞ昼の雁「かり」をいたりとて奇な
りとせじとは我を盲人「もうじん」同前に
かるしめし一言「いちこん」何ぞ生ていらるゝ

(1 11オ)

べき元昌手を打て大ひにわらひ
汝今殿の打擲「ちうちやく」は尤といへども
是罪に伏したる処ありたゞ
不破が悪言「あくこん」をいさゝかいきどふ
ると見へたり是私しの怒りに
して忠義の利いづれに有や
臣たる者忠に死し子たるもの
孝にしするは道なれども嘲哂「てうろう」
せられし事を怒り切腹して

(1 11ウ)

死なんとほくひなきたわけとや
いわん一向死に足らざる不覚者
なり汝不破が言し事をさほど
怒るならばいよ／＼武術に心を入
せん場に出て人にすぐれ敵の首
を取て武勇の種をあらわし
なば一つには忠義となり二つには
此度の恥辱をすゝぐ其元今死
する命をもつて君の馬前にて高「かう」

(1 12オ)

名せよ死したりとて今の人汝が死
をかんぜんやと理を尽して申け
れば佐々木内膳初めてさととりて
刀をなげ捨「すて」元昌「げんしやう」を拜して其元
のおしへにあらずんば家既に忠
を被り申べきによくも日比の心

さしをわすれずして家に忠を
すゝめられけるこそ嬉「うれ」しけれと涙「なみた」
をながして悦びそれより酒などを

(1 12ウ)

出し元昌をもてなしかへしける
佐々木内膳は既に元昌が諫めに
依て死をとゞまつて我と恥をし
のぎ無念を堪「こら」へて暮「くら」しけるが
是よりは病「やまい」といつわり暫「しほら」くは出
仕をとゞまりける然るに佐々木内
膳舅「しゅう」と川越「かはこへ」源太夫方へ夜咄「よはな」しに
行て帰りけるが不破が屋敷の前
を通りけるに何とやらん五六人の

(1 13オ)

声にて打笑「わら」ひけるを風と佐々木
内膳といふ聲聞へければ何事を
いふやらんとかつと軒に立より耳「みこ」を
済して聞しに万左衛門が聲「こへ」とし
て佐々木内膳かり場「ば」にて弓をかやふ
にし矢「や」を取るかやふに放ちたるに鷹「かり」
は行すぎ矢はそれたりゆきかた知れ
ずなどゝいよゝと虚言「きよこん」をまじへ
て仕方を入れて咄しけるに大勢甚だ

(1 13ウ)

笑ふ体内膳思わず刀「かたな」の柄に手
をかけ内へ入らんと思ひけるに心を
制して元昌が我をいさめしは
爰なりと思ひ返し無念をこらへ
我家にぞ帰りける是よりいよゝ
佐々木内膳不破万左衛門をにくみ
さだめて一家中こぞつて我を笑
ふらんとたゞ案じわづらひてぞく
らしける

(1 14オ)

曰世ぞくに物種太郎といふ
浄瑠璃の本書不破万左

衛門名古屋山三といふ兩人

をのせたり是は関白「くはんばく」秀次
公の小性に不破伴作と名

古屋山三郎といふ美童「びとう」あり
しかども文禄四年高野「かうや」

山にて秀次公御生害「せうかい」のとき
一処に殉死「しゆんし」せり然る処に

(1 14ウ)

作者「さくしや」物種太郎にくはへて
用ひたりと見へたり

物種真考記第壹終

(2 1才)

物種真考記卷二

目録

一 物種太郎利林「としやす」か事

并 不破万左衛門不覚「ふかく」の事

一 物種太郎芦屋「あしや」方へ討手の事

并 佐々木内膳手柄「てから」の事

(2 2才)

物種真考記卷二

物種太郎利休「としやす」が事

并 不破万左衛門不覚「ふかく」の事

爰に物種新左衛門利隆「としたか」といふもの

あり武術「ふしつ」に達し文筆にくらから

ぬ忠誠の氣質「きしつ」なれば忠輝「たゝてる」公の

御心に叶ひ一家中の武じつの師

とせり家嫡「かちやく」太郎利休「としやす」は父におとり

(2 2ウ)

武じつをきらひ殊に病身なれば

よふ少より言ふまゝにそだてければ

愚鈍「くどん」にして其形中々武門の家

には似合ぬ人がら一家中の者ども

唯太郎／＼とあなどり軽「かる」しめ

なぶり物になれどもさしていかる
とおおふ事もなくたわけ者と成てくら
しける父新左衛門是を大きに歎「なげ」き
かなしみている／＼異見「いけん」いたし

(2 3才)

けれども何といふても愚か者なれば
其かひなく捨育「そたて」になしける既に慶
長元年にあたつて物種太郎廿
才に成ければ父新左衛門元服「けんふく」をいた
させけれども何とやらんたらざるうつ
け者ゆへ出勤「きん」致させなばいか成あや
まりを仕出さんも知れずといまだ部
屋住「すみ」にて置けるが忠輝公かねて物
種太良が事を聞召及び給ひくるし

(2 3ウ)

からず出勤致させよと再三仰付ら
れければ新左衛門も今は是非「ぜひ」なく
太郎を出勤「きん」致させけるに思ひの
ほか殿様の御心に叶ひ昼夜「ちうや」かた
わらを放し給ひがたく愚鈍「くとん」なるを
返つて賞美「しようび」し給ひ太郎をなぶ
つては一けふをなし笑「わら」ひのたねと
成ければいかさま物種とは能名「よきな」
なりとて御前の首尾「しゆび」よかりければ

(2 4才)

新左衛門も安堵して悦ひくらし
けるすでに此年もくれて慶長二
年の春越前「ゑちせん」の国福井「ふくい」徳川秀「ひて」
康「やす」公まで使者を送「おく」らるも義有ける
に物種太郎此役目「やくめ」を承りふく
井に使者を勤「つとめ」けるすでに福井
にも成しかば直様登城致しけるに
其さまあほうらしき男ゆへ一家中は
目引袖「そで」引彼こそかねて聞与板「よいた」の

(2 4ウ)

うつけ者物種といふ者よとて笑

ひそしり致せども耳「み」にもかけず
御前に伺公せり秀康公もかねて
名を聞及び給ひしかば御前に近く
まねき給ひ使者の口上を聞給ふに
太郎少しも臆「おく」する体なくつま
びらかに言上致しける秀康公仰せ
けるは聞しに増る物種は利口者
いでほう美「び」を取せんと御前也菓子「くわし」を

(2 5才)

あたへ給へば小児のごとく少しも
遠慮「どんりよ」なく菓子「くわし」をつかんで打食「くら」ふ
夫より御暇「いとま」を給わりければ近習「きんしゆ」十
六七人玄関まで送り出る御連枝「れんし」の
使者たるゆへなり既に玄関迄出来
りければ物種太郎袂「たもと」より巾着「きんちやく」
を取出しどなたも御苦勞成とて銭「せに」
一文づゝあたへ夫より与板「よいた」へ帰りける
近習ども大きにあきれ扱「く」けし

(2 5ウ)

からぬうつけかな且又我々を軽しめ
一銭「せん」づゝあたへしは何事ぞやと此由
を秀康公に言上致しければ秀康
公笑わせ給ひ是正直の至り少しも
へつらふ心なし一銭にてもあたへしは
物種が誠「まこと」の心よりなす成されば
黄金「わうこん」武器馬具を心ならず人に送
るは是世上のかざりへつらひなり
よくも汝じら一銭を受たりとかへつて

(2 6才)

笑談「しようたん」なされける物種立返りいさゝ
忠輝公に言上致しければ大きに
誉「ほめ」給ひ扱々汝は安房「あほう」にはあらず
大たん不敵の者ぞかし我家中「かちう」多
しといへども中々秀康公の近習に
一せんをあたゆるほどの者はあらずよくも
でかしたりと誉「ほめ」給ひ是よりいよ／＼
御前にて用ひられけるが殿忠輝「たづてる」公の

御名をかたり城下に於て金子五百両

(2 6ウ)

町家より借「しやく」用致しけるが返さひ
不埒「らち」より事ろけんしてけるほどに
不破万左衛門庸茂「つねしげ」殿の御意を承り
芦屋「あしや」金平方へ趣き金平に対面
し其方事此度殿の御名をかたり
大金を借用致す事既に露頭「ろけん」せり
依て不破万左衛門をもつて其つみを
たゞさるいかゞぞやと申ければ芦屋「あしや」金
平所詮のがれぬ事とや思ひけん

(2 7才)

心をけつして今は何おかつゝむべき
いかにも大金借用致したり然れど
もかくろけん致す上は殿さまへの申
訳「わけ」にたゝ今切ふく致して相はつべし
と刀「かたな」をぬくぞと見へしが不破万左衛門が
肩「かた」先をぞ切付たり万左衛門大きに
げふ天して是にまかせて一遍「へん」に朱「あけ」に
染「そみ」てかけ出る金平は血まなこに成て
追出る此時に不破と同じく役を受し

(2 7ウ)

赤坂多門刀を抜「めい」て金平に切て
かゝり戦ひしが大げさに切はなし
ければ万左衛門はふるひわなゝき城内
へにげ帰り此よしを忠輝公に言上い
たしける忠輝公急ぎ不破には保養
仰付られ悪「にく」きあしや金平がふる
まいかな此上は誰おか討手に遣わさ
んとひしめき何分取にがす事なかれ
と芦屋が屋敷を取かこませたまひ

(2 8才)

討手をこそは弾「だん」ぜられける一家中
たれも望む処なれども手に余る
ほどならば我身の恥辱「はじ」と顔「かを」を見
合せ居たりけり

物種太郎芦屋「あしや」方へ討手の事

并 佐々木内膳金平を生捕「いけとる」る事

扱も芦屋金平は所詮のがれぬ我

(2 8ウ)

命と思ひ使者赤坂多門を切殺「ころ」し
是より死物くるひと其関に立あら
われはだには鎖帷子「くさりかたひら」と□はちまき
たすき身がるに出立三尺一寸の太刀「たち」
を横「よこ」たへうつ手来らば切ころし
めいどの供にたつれんといまや／＼と
待かけしに城内にはいろ／＼へう義
有て誰をがたと仰せられければ物
種太郎進み出それがし願わくわ

(2 9才)

此討手になるべしと申ければ殿
をはじめ諸士皆々大きにあきれて
笑わぬ者はなかりけり忠輝公仰られ
けるはさん／＼よくも討手を重つれど
中々汝討手に向かひなば金平に切殺「ころ」
さるゝは眼前なり此役は余人にゆづ
るべし其方は又相応の役を申つく
べしかならず／＼身におふぜぬ事を
なして一命をうしない人もほめざる

(2 9ウ)

事を致す事なかれ物ぐさ太郎申
けるは何余いか程の事か有へきぞ
太郎奉り金平をいましめ御前
に引すへ御目にかけて候はんおの／＼は
芦屋をば恐れ給へども我らは藁「わら」人
形「けふ」と見るごとし少しも恐るゝ心
なしとて此討手を乞受て打むかふ
にさして衣「い」るいをもあらためず上下
着ながら城中を立出る不敵といふも

(2 10才)

余りなり城内の残士是を見て物種かよふの敵を恐れず打向ひけるとそやすからね日比はたわげに安房「あほう」よとわらひ笑ひ者なり其あほふに咲きを越れ物ぐさに金平を生どらせては家々がはじ成べしいざや来れ金平を生とりにし物ぐさが鼻「はな」あかせよと丸橋「まるはし」源十郎根来「ねころ」禅治など屈「くつ」けふの若者ども我もくくと三十余人金平が

(2 10ウ)

方にぞ向ひける扱又物ぐさは城内を立出たゞ一人空声「くうせう」に呼わりくく芦屋金平が討手として物ぐさ一人むかふなりと家中の屋敷をふれまわり夫より我家「や」へ帰り上下を取寝「ね」とする新左衛門母と共に此やふすを聞て其方は芦屋金平が討手とうけながら何ゆへにねんとはするぞや物種いやつ寝入致するに金平を生どる

(2 11オ)

べしと少しも心にうけ給ふなとよこになりしがいびき聲螺「こへほら」のごとく前後もしらず寝入ける新左衛門夫婦もてあましいかにあほふなればとて一向に取処もなき有様と新左衛門是非なく金平が方へ向ひけるはや丸「まる」ばし根来をはじめとして十五六人は金平が家へ乱入するに討手に向ひし物種は見へず扱は宿元「や」ともとにて身拵「こしら」へやてら

(2 11ウ)

御らんのひまなり芦屋を生捕物種にはじをあたへんと打入見れば芦屋金平太刀を真向「まつかう」にかざして電光「てんくう」のごとく打ふり元来手練「しゆれん」の武術なれば十五六人を前後左右に引受秘「ひ」じつを尽して戦ふに矢庭「やには」に三人切たをされ残りもあぐれて見へにけり此比

佐々木内膳は昨年より狩場「かりは」の恥ぢよく忘れがたく心をくだき何とぞして

(2 12才)

此はじをすゝがんと思ひくらしけるに
今年と成かつ今芦屋金平殿の御
名をかたり大金を借「しやく」用し返さい
不埒「らち」につきて不破万左衛門使者に向
ふに罪を糺す「たゞ」すにあやまつて金平に
切れ立帰りしより討手と向ふのよし
天のあたふる処なり我生捕て日比「ひころ」
の武じつの種を見せん物と思ひ
其用意をなす処に物種太郎討手の

(2 12ウ)

やくと承る事太郎自身屋敷中を
ふり通りけり佐々木内膳思ひけるは
かねて芦屋金平は一家中にて手前
ばへ有武じつの達人中々物ぐさ
その手には生どりがたし然れば
太郎役目を受たれば我むかひ
金平を討にあらず是人のかうを
うばふなりあほうなれども元来
新左衛門は家中の武術の師はん

(2 13才)

致すゆへさこそ有べしと思ひ
けるに是家の武士物種に手が
らをさせて常にあなどりかろん
じたる身いかでか濟べきとて皆
金平方へ向ひしと聞いていかさま
さこそ有べし佐々木内膳も五百石
拝領しなから物種の向ふにふと
ころ手にて安閑として居られまじ
いでや我も向わんと慳「かし」の木「き」の

(2 13ウ)

六七人あまり有棒「ほう」を握「にき」り腰「こし」には
とりなわを引さけてたゞ老人金平
が方へ向ひしにはや三四人切た

をされて丸橋「まるはし」根来「ねころ」為あぐんて
居る体なれば佐々木内膳加勢
申さん是のき給へと櫓の棒を打
ふつてかゝりければ金平太刀を
もつて切払「はら」ひ秘じつを尽し
て戦へども佐々木は棒の達人なれば

(2 14才)

終にあし屋が太刀「たち」をうちおとし
さん／＼に叩きふせ生捕「いけとり」ける夫より
おくへ声しけるに金平が宗門
男女とも凡廿人ともに生捕にして
一息つき＊ける折から物ぐさは目をす
り／＼此処へ出来り物々おの／＼た
ちいかひ御苦勞千万金平はいかに
生どられしか丸橋根来は太郎を
とがめ其方何ゆへ討手のやく義を

(2 14ウ)

受ながら今迄遅参「ちさん」せしぞ物種
かぎりなく打笑ひ我らは討手の
役義を受たれども宿元にて宿入
たり又討手の役義を受けてきり
殺されなどせんよりは寝「ね」には心地よ
き物なりと金平に切りころされし
人々を見てよめる歌に

世の中に寝「ね」るほと楽「らく」はなき物を
しらぬたわけは起「おき」てはたらく

(2 15才)

とぞ詠じければみな人々大きに
わらひ常々人にたわけよとわらはれ
し太郎がけふは人をたわけり
致したりと打つれて此よしを
とのさまに言上致しければ忠輝
公大きにかんじ給ひ物種は大に
そう明なる物ぞかし我やくめを受「うけ」
ながら寝入てそれをもつて人を

(2 15ウ)

はげまして生とらせその大事
のやく義をうけながら我家「わがや」にて
寝たりとはさて／＼不敵の生
根なりおしきかるや元来は多
病「へう」なり其うへ愚案「くあん」にして人に
かろしめられ一生をくらさん事を
おしむなり夫に人なみのゆう気「き」
有ば天晴「あつはれ」人にしらるゝほどの武士
に成べきによらじやくなる生れ付

(2 16才)

こそ是非「ぜひ」なけれと大きにかんじ
給ひつゝ百石処領「しよりやう」をあたへ給へり
けり

(3 1才)

物種真考記卷三

目録

一 不破万左衛門物種を欺「あさむ」く事
并 佐々木内膳勇氣「ゆうき」の事

一 上総介殿関「せき」が原「はら」出陣の事
并 不破悪計「あくけい」百性一揆「き」の事

(3 2才)

物種真考記卷三

不破万左衛門物種を欺「あさむ」く事
并 佐々木内膳勇氣「ゆうき」の事

去程に此度芦屋「あしや」金平非道「ひとう」よつて
つみを致されけるに不破万左衛門に手疵「きず」
おわせけるより大きに騒動「そうとう」いたしけるに
物ぐさ愚案「くあん」ながらとんちをもつて
残士共に佐々木内膳をはじめ金平を

(3 2ウ)

生捕ければ忠輝公大きに物草を賞「しよふ」
美「び」し給ひ百石の処領「しよりやう」をあたへけれ「と」
又去年より内膳出仕をとゞまり居

けるが是より出仕をゆるされ金平を生
どりしほうびに時服「しふく」一重給はりけ
れば日比の恥辱「ちじよく」しうびをひらき
さみ悦び有がたく御前「せん」を退出いた
しける夫よりしていよ／＼一家「か」中
物ぐさをあなづる者なかりける斯て不破

(3 3才)

万左衛門は思わずも芦屋にあざむかれる
かくの痛手「いたて」をおひければ無念「むねん」に思ひ
侍に日比あざけりわらひし佐々木
思わず手がらなすといひ是物ぐさ
が働「はたら」きかた／＼ねたみいきどぶり
居たりけるが疵「きず」も既に平ゆふ致し
ける折から物種太郎不破が表を通「とふり」
けるを呼入万左衛門あざけり申けるは
扱／＼其元は父に似てはつめい

(3 3ウ)

といひ勇氣さこそとかんじ申なり
いかに物種どの其元は化「ばけ」物を見とゞけ
給ふかやと思ひかけなく申ければ太郎
は何心なくいかにも化物はいかやうのおそ
ろしきにも恐れたる事なしと口より
出るまゝに申ければさこそ／＼然らば
化物を恐れ給はずは今宵「こよひ」四ツ時分「じぶん」
我かたへきたられよおそろしきば
け物を見すべしかならずおどろ

(3 4才)

き給ふる太郎打ちわらひいかにもまいる
べしかならずばけ物を見せ給へと
約束「やくそく」して帰りける不破は太郎をあ
ざむきかへし彼もの大たん成と
いふは只あほふにしてはぢをしら
ず心の俣「まま」におこなふ也誠の大たん
か不敵か此夜かれをためしおく病「べう」
ならばわらわん物とてわら人形「けう」を
拵「こしら」へてめんをきせ用意「よふい」してくれる

(3 4ウ)

を遅「おそ」しと待けるにまだ西に日のな
るめ成時分にはや物ぐさ出来りいかに
親父「おやち」どの化物を見せ給へとのぞみける
不破は扱こそ化物といふ物をいまだ
しらざるゆへかやうに望むこそおかしけれ
いできもをつぶさせて見せんずと
我かたにもてなし置既に其夜「よ」四つ
時に成ければいかに太郎どの全く化物
といふ物かよふに仕ておる処へ来「く」る物

(3 5オ)

ならず挑灯「ちやうちん」をともさず一人我屋敷の
傍へまわり給へ二三度行かよひ給はゞ
かならず狸「たぬき」がばけていづる也とくと
見とゞけ給へといひければ大におどろ
き我はつゝに夜「よる」一人出たる事なし
其許も同道「とう／＼」ならばいかにも来るべし
さなくては化物より側「そば」あたりがおそろ
しく候と面色「めんしよく」かわつて答「こた」へければ
扱こそと不破いや夫にては手がらに

(3 5ウ)

其元一人御出其化「ばけ」物を仕とめ給へと
いふ太郎辞「し」すれどもゆるさねば力「ちから」及ば
ず不破が屋敷のうらへまわり此屋敷
のうしろ皆沼田「ぬまた」にしてほそき道「みち」あれ
ども行通「かよふ」ふ人すくなし物種ついに
夜あるきしたる事なければふるい
／＼うらみちへまわりけるが心に
おもふやうばけ物ついに見たる事
なければどもゑきなき事成べし

(3 6オ)

見とおそろしき目にあわんより
帰るにしかじと足にまかせてにげ
かへりける此時不破はかのわら人形「けやう」を
松の木の上に置なわをもつてつりさ
げるやうにして下人に申付太郎が通「とふ」
るあし音「おと」を相づにつりおろす用意

して待処に佐々木内膳義通「よしとふ」夜「よ」は
なしのかへるさ不破が屋敷のうら
を通りける足音「あしおと」を太郎と思ひ松に

(3 6ウ)

かけたる化物を思ひがけなくつりおろし
ければさしもの内膳大に仰「げう」天して
飛「とひ」しざり伺「うか」ふに松の上よりつりさ
けしなわみゆる扱は不破我に不覚「かく」
を取せんと通るを待受かやうな物を
拵「こしら」へ欺「あさむ」くと見へたりにくきもにくし
と飛かゝり彼ばけ物を引つかみさ
げしなわも引切て我家へこそはかへ
りける不破はかくともしらず伺ふ処に

(3 7オ)

松よりさげたるなはきれて落ければ
あやしと人をもつて尋ぬるに化「はけ」物
も太郎も終には居ざるよし告「つけ」ければ
万左衛門大に仰天し扱こそ物ぐさはう
つけものと思ひしが誠に不敵のくせ
者としたをふるわしけるもことわり
なり其よく朝「ちう」佐々木内膳かの
化物を御前「せん」にもち出不破万
左衛門かやうのものをこしらへ某「それがし」

(3 7ウ)

通「とふ」りあわせ取歸りに扱／＼ふらち
千萬と言上いたしければ物種是
を見て大きにおどろき是は昨日わたく
しにかやう／＼に申て夜ぜん化物
を見に来れといわれしゆへいかにも
と来りしが見ておそろしき物
なればゑきなしとすぐさま立歸り
候昼「ひる」見てもおそろしきに夜ぜん
見たらばいかはかりと物ぐさ大に恐れ

(3 8オ)

けるもおかしけれ忠輝公大きにいかり
給ひ悪「にく」き不破がふるまひかな愚「おろか」成

物種をあざむきなぶりけるこそやす
からねいそぎ其つみを糺「たゞ」せよと急に
召給ひ御尋ね有けるに全く下人の
わざにて毛頭「もうとふ」身に覺なしといつわり
けれどもあたわず終に罪「つみ」にふかしけれ
ば三百石の処領二百石上げられ百石
になされける万左衛門心中に大にいかり

(3 8ウ)

扱くくにくき物ぐさがふるまひ佐々木
内膳御前の恥辱「ちしよく」を根「ね」にもつて我
にかほどのなんぢういたさせけるこそ
無念なれ此上は百石の知行召上ら
るゝともいとわじ内膳を打はたし
て恨「うら」みをはらさん物と心にふかく
うらみけるが身のはめつとぞ成にけり

上総介殿関「せき」が原「はら」出陣の事

(3 9オ)

并 不破悪計「あくけい」百性「せう」一揆「き」の事

既に時来り時いたつて慶長五年の
頃に成しかは此時石田治部少輔光成は
濃州関ヶ原「せきかはら」に出陣いたし上杵景勝「かけかつ」
は奥州会津「あいづ」におこり徳川神君「しんくん」を
討奉らんと前後より逆「きやく」心いたし
けれども徳川神君は宇都宮「うつのみや」より
福島左衛門大夫加藤左馬之介平野遠

(3 9ウ)

江守黒田甲斐「かい」守真田「さなた」伊豆守門隱
岐「き」守等をはじめとして三万五千余
騎にて打てのぼり給ふよし越後与「よ」
板「いた」へ聞へければ父君にちからを添「そへ」ん
とて上総之介の口はつ向「かう」有米倉「よねくら」民部
嶋川一学「かく」物種利太郎等をはじめと
して八千五百よきにて関「せき」が原「はら」の陣
にくわゝり給う此内に不破万左衛門病「べう」
氣「き」といつわり戦場「せんせう」へは来らずして

(3 10才)

本国に残りける爰に佐々木内膳は此度の先陣をのぞみけれども忠輝公ゆるし給はず汝は本国に残り城「しろ」を大切に守るべしとて既に戦場におもむ

き給ひければ内膳ぜひなくも家嫡「かちやく」

甚蔵を君の御まもに遣わし我身は

本国に残りける万左衛門此度べうきと

いつわり本国に残りしは全く内膳を

害「かい」せんため也とぞ聞へけり此時戦「せん」

(3 10ウ)

場「せう」の兵糧「へうらう」奉行は河越「かわごへ」源太夫いたされければ内膳我しうと成ゆへとも心を

付て大切に兵糧をおくる度に三嶋郡

中瀬「せ」村とて三千石の領内毎年ふ作「さく」

のよし年貢「ぐ」不参いたしければ内膳

此度の事なれば急度糺明「きうめい」せんもの

とて中瀬「せ」の庄「せう」や十余人呼「よび」出し

申けるは殿様此度関「せき」が原軍「ぐん」「用」に付

兵糧ともしく「是に」中瀬「せ」村の事は毎「まい」年

(3 11才)

不作のよしにて不足「そく」いたす事なれば

此度は汝「なんじ」等もめいわくながら此度の御用

の義ゆへ爰三日の間に千俵「へう」米をてう

進仕るべしもし此度遅「ち」たいせば是

迄の不足「そく」御取立仰付らるゝの間延「ゑん」引

なく調を仕るべしと申渡されければ

庄屋おどろき村へふれわたしければ

三日の中によふ／＼米五百俵にはたらず

是にてはいかゞせんと中瀬「せ」郷「かう」の百姓「に」

(3 11ウ)

大に困窮「こんきう」なんじういたしけり不破万左

衛門此時を伺「うかゝ」ひ時こそ来れと流言「りうげん」

をもつて中瀬村の百姓にいわせけるは

兵糧「へうらう」米調進「てうしん」は全く殿様より仰

出されたるにあらざ佐々木内膳わたく

しをもつて民に申付たる処也といろ
／＼といわせければ百性ども大におど
ろき扱こそ佐々木内膳が私欲「しよく」のため
我らをくるしむる処也とて我身のつら

(3 12才)

きより百性共悪心をはつしてすでに
三日の日限「げん」も過米はとゝのわずわれ／＼
がつみきわまりたる幸「さいわ」ひ殿さまは関「せき」が
原の関処へ出給ひ空城「くうせう」也われ／＼三
千石の領内の百性一揆「き」をおこし与板
にせめよせ城をせめ落して三日にても
栄花「ゑいくは」をきわめ是を此世「よ」の思出に討「うち」
死せんにはしかじとて無法の悪計「あつけい」を
おこし一人発言「ほつごん」いたしければいかさま

(3 12ウ)

此義然るべしとてぼう若「しやく」無人の百
性等幸ひあつめし兵糧「へうろう」を我兵糧
となし我も／＼と中瀬「せ」にあつまり
し一揆「き」ども二千人いざや城へ攻「せめ」よせ
んのいきほひをなしければかゝる乱「らん」
国の砌りといひ百性の一揆有ければ
城内のそう動「どう」いわんかたなく我も／＼
と甲冑「かつちう」にてあつまり来るを城内
に相待「まち」けり佐々木内膳申けるは全く

(3 13才)

是三日の間に兵糧米調進「てうしん」仕るべし
と申渡したるによつてならん然れ共
乱国「らんこく」のことなれば是しきの一揆「き」は少
しも恐るにたらねども是を見給ひ
国中に一揆「き」せんもはかられず然れば城「せう」
下へ引受ては叶ふまじ此一揆ども
をなだめとかくしづむるにはしかずと
て内膳わづかに手勢五六騎「き」にて中
瀬にこそはむかひける不破万太郎大

(3 13ウ)

に悦び内膳を打はたす時節こそき

たりつれとて姿「すかた」をやつし鉄砲「てつほう」をたづ
さへ付ねらひ後「あと」をしたふこそ我つみ
を一揆「き」にゆづらんためのふかきほう計「けい」
とこそしられけり

物種真考記三終

(4 1才)

物草真考記卷四

目録

- 一 佐々木内膳一揆「き」を鎮「しつめ」める事
- 并 不破内膳をうつ事
- 一 一揆の百性疑「うたかひ」を受死刑「しけい」の事
- 并 中瀬「せ」村百性助六孝心「かうしん」の事

(4 2才)

物草真考記卷四

佐々木内膳一揆「き」を鎮「しつめ」る事
并 不破内膳を討事

己が身を立んとして人をがいし又
わが身をめつするものいにしへより其
数をしらず不破万左衛門はいらざる人
をあざむき恥「ち」じよくをとりかへつて
悪事をおこし佐々木内膳を討んと

(4 2ウ)

計りける先中瀬村に一揆「き」を興「おこ」させ
百性をかたらひけるに折から殿さま
には関「せき」が原御出陣の御留守ゆへ城
ちう大きにそうどふし是庄よりうれい
をこしければいまや一揆のよせ
来らんと皆武具「ぶぐ」をして扣へしに
内膳申けるは何そかよふに乱国の
事なれば某しはかの村に立越「こへ」百性「せう」
を一まづしづめ申さんにまなか城

(4 3才)

下へせめよせさせなば返つて是を見
ならひ一国の百性一揆「き」をおこすまじ
きにもあらずと僅「わつか」手せい五六騎にて中
瀬村に立越けると不破万左衛門は
よき時せつ至来と我身は百性の
姿にやつし鉄「てつ」ほうを横「よこ」たへ内膳
が来るを遅しと待かけたり内膳
かくとも夢「ゆめ」にもしらずすでに中瀬
村にきて見れば一揆の百性二千余き

(4 3ウ)

木やり鋤「すき」くは鎌「かま」「棒「ほう」」に至るまでみ
な／＼得物を打かたけ今こそ城へ
おし寄ん気色「けしき」にてときをつくり
螺「ほら」を吹き大鼓「たいこ」をうつてさもおびた
しく見へにける佐々木内膳馬上
ながらいかに一揆「き」の者どもまつ／＼しづ
まれ某が申こと能／＼「よく／＼」聞べし汝し「なんじ」ら
殿さまの命にそむき兵糧「へうろう」米を調進「ちうしん」
せざるのみならず返つて乱「らん」を興「おこ」すこと

(4 4才)

そも同事ぞや然れども今四海「しかい」今
だおさまらずよつて此度のつみをゆるし
汝らが此度と／＼のへたるほどの兵糧「へうろう」米
にて當時御なさけをもつておゆるし
なさる是にても乱「らん」を興「おこ」し国をさわ
がすやいかに／＼と申ければ一揆「き」の者
ども大きにおどろきかく有がたき仰せ
なれば何条命がけの一揆を興「おこ」すべき
やわれ／＼は命をこそ惜「おし」けれど申け

(4 4ウ)

れば庄屋のめい／＼立出て御じひ
ふかき御上の御意かく仰付くる事
何か一揆「き」をなし候わんや然らば只今
と／＼のへ是有日どの兵糧米に五百俵「へう」
ほど御座候是にて御免下さらば乱「らん」を
納めて引かはん内膳いかにも然らば

其兵糧米を城下にはこび一揆「き」の者共
引退きかへと申渡「わた」しければ仁者「しんしや」に
敵なし愚智の百性ともなれば内膳が

(4 5才)

一言に早そく乱をおさめ我もくと
引退きけるほどに佐々木内膳は早々
城中にかへり安堵させんと思ひ馬をは
やめて立帰る処にいづくともなく鉄「てつ」
砲「ほう」のおと耳「み」元「もと」にひきて内膳が胸「むね」
板へ玉飛「とひ」来りければ何かは以てたまる
べき馬より真逆「まつさか」さまに落て即死する
郎どうども大きにおどろき悪「にく」き一揆
のふるまいかなとうろたへさわぎ煙「けむり」の立

(4 5ウ)

しはかのもりか此もりかと爰に至り
かしこに尋ぬといへども打たる為手はしれ
ざれば涙ながらに内膳が死がひを
やうくと馬にのせて城中へ帰り右の
よしをくわ敷申ければ城中の留主
居矢野内匠「たくみ」扱は百性一揆の内より
此内膳をにくみなせしやあさましき
次第やと愁傷「しうしやう」す不便「ふひん」やな佐々木内
膳は国の乱をなげきじひをもつて

(4 6才)

一揆をしづむるに愚知「ぐち」無智の百性共
内膳がことはいつわりと思ひだまし討に
致しけるこそ安からね最早此上は矢「や」
野内匠「たくみ」一揆「き」のやつ原一人ものこさず討
ころし内膳が手向にせづんは有べか
らず悪「にく」き百性めらとすぐさま矢野内
匠武具を着し用意為処に中瀬「せ」村
大庄屋「せうや」岩「いわ」の進「しん」を始めとして庄屋の
□々一六人我もくと城下へ来り此度

(4 6ウ)

のつみ御免下され□□条ありがたく御
札の為参上仕ると城中へ申入ければ

矢野内匠幸ひ成と皆城中へ呼入
一人も残らず高手小手にいましめ
ける庄屋めい／＼大きにおどろきこわ
いかにと顔を見合せ居たりける内匠
みな呼出して大きにいきなり汝ら此度
兵糧米調進「てうしん」の日限「けん」延引「ゑんいん」と致し
其上一揆をおこし只今殿様の御留

(4 7才)

主をあなどり城下におし寄んとは
にくき重罪一人も残らず合にうづみ
殺「ころ」すべきやつ成を内膳仁心を以て
じう罪をゆるし乱国の時節ゆへ
いかよふ成義出来せんも計られずと
じひを以て一揆「き」をしづめる処に暖／＼
承知仕り一旦しづまり返「かへ」へつて
飛「とひ」道具にて内膳を討取其上此つみを
のかれんとて御礼の為参上とはのぶとき

(4 7ウ)

ぼう計極重悪「こくしうあく」の汝らさる張付にかく
るゝあいだ覚悟「かくこ」せよと内匠多きに怒て
呼われば百性共はあきれば何と
こたへんやうもなく只顔「かを」を見合す斗り
なり大庄屋岩「いわ」之進「しん」やゝ有て申けるは
まつたく家ゝども御上の御じひを
かんじ奉りて早々に一揆「き」をしつめ
引退かせ申候まつたく内膳様を鉄砲「てつほう」
にて討しとは皆々身に取て覚へなし

(4 8才)

此義は幾重にもとくと御せん義下さ
るへしと言上す内匠いよ／＼いかり
さこそ有べし中々通例にては白状「はくせう」
致すまじ先ごく中に打込置よと申
付る庄屋どもを早そく獄「ごく」屋へ入られ
けるこそぞひなけれ矢野内匠は先
此度の内膳の横死「わうし」の次第いさむに
戦場「せんしやう」へ往進するそれより庄屋共を
毎日／＼引いだして拷問「かうもん」にあふこそ

(4 8ウ)
不憫「びん」なり

一揆「き」の百性「せう」疑「うたかい」を受死刑「しけい」の事
并 中瀬「せ」村百性助六孝心「かうしん」の事

爰に不破万左衛門は我日比の大望「もふ」成就「せうじゆう」して
なんなく内膳を打殺「ころ」しければ今は
心中にわらいをふくみ又我なしたると
いふ事するものなく只百性一揆「き」のし
わざと也庄屋十六人の者どもは毎日

(4 9オ)

／＼つらき拷問「かうもん」にあいければ是をふ
びんとも思ふ心なくかへつておもしろ
き事に思ひ己がしわざながら内匠「たくみ」と
ともにつよく詮「せん」義いたしけるごう悪「あく」奸「かん」
賊「ぞく」といひながら天のとがめおそろしく
庄屋岩之進申けるはかやうに毎日／＼か
う門「もん」せらるゝといへども十六人の者ども
一向「かう」に覚へなし是は其せつ鉄砲「てつほう」を
持たる者の処い成べしといふ内匠も

(4 9ウ)

実「げ」にもと思ひ万左衛門に命じければ
いそぎ中瀬にいたり一揆「き」のせつ鉄「てつ」ほう
持たる者詮議致しけるに早そくたづね
出して二百十六人も皆いましめ城中
へ帰りければこれをもかう門「もん」いたしけれ共
とかく内膳を打たるものしれざれば内「た」
匠「くみ」も今はせんぎにあぐみ居たりける
此時関が原へ百性一揆「き」の事且又内膳
横死「わうし」の事いさる注進「ちうしん」しければ忠輝「たゝてる」公

(4 10オ)

内膳が嫡「ちやく」男甚蔵に御いとま給わり
国の一揆は物草新左衛門よろしくしづむ
へしと仰付られるすぐさま佐々木甚
蔵物ぐさ新左衛門戦場「せんせう」より本国へ立

帰りける扱も佐々木甚蔵は父内膳が
横死「わうし」をなげき何分父を討たる百性
めを給はり候へ父が墓前「ぼぜん」にて半「ばん」すん
に切さき手向たし事願ひける扱又
物草新左衛門内匠とともに庄屋ど

(4 10ウ)

もをつよくかう門「もん」致しけれどもとかくに
しれざれば夫より新左衛門はからいと
して二百十六挺「てう」の鉄砲を取よせ
其日打たる者をせんぎするに人おど
しのために鉄砲を打たるもの三十余「よ」
人もければ残りのものどもはつみを
ゆるし何分此内成へし又とくと
せん義するに一向「かう」しらざる者どもなれ
ども一言半句「ぐ」にてもいひあやまりし

(4 11オ)

者は監うさんなりとてとめ置申訳「わけ」
すゞしきもの十六人つみをゆるし
残り十四人拷問「かうもん」いたしけるに是にも一
向しらざる者どもなれば中にも人為
といひつねのふるまひあしきものども
四人をゑらみ出しさだめし此中
らんとてついに死「し」けいにおこなひごく
門「もん」にかけられしはぜひもなき事
とも扱も佐々木甚蔵は父の敵は是

(4 11ウ)

ぞといふ事もなく四人死刑「しけい」に成けるを
父が敵討たるといふ心にてすませしは
むねん也ける次第「しだい」也是に引かへ不破万
左衛門は我つみを百性共へゆづりければ心
中の悦びいわんかたなくいそ／＼として
くらしけるこそ深悪「しんあく」なれ爰に中瀬
村の百性助六といふ者は親に孝心「かうしん」の
者なりしが此度父助右衛門鉄砲処持「しよぢ」
しけるゆへ一揆「き」二千余人の内よりゑり

(4 12オ)

出され佐々木内膳を打死しとうた
がわれ此度死刑「しけい」におこなわれ村のはづ
れにおいて獄門「こくもん」にさらされければ助六
大きに此事をなげきかなしみ我父
にかぎり人を打べき人にてなし此度
の死刑「しけい」は無せいばい也とひたすら此
ことをうらみ歎「なげ」きたとへ父が死「し」はな
げきてもかひなし何とぞして佐々木
を討たる打手を尋ね出し父の汚「お」

(4 12ウ)

名をすゝがんと思ひけるほどに當村
の氏神「うしかみ」平等の森「もり」は八幡宮「はちまんくう」の神前
にまふでゝ祈けるは死「しゝ」たる父は
ぜひもなし何とぞ佐々木を討「うち」たる
罪「さい」人を知らしめ給へ然るときは
人が人ごろしのあく名をのがるゝ
処にて候ぞと一七日のれどもその
かひなく誰ともしれざりければ
助六はなげきかなしみさい度

(4 13オ)

八幡宮「まんくう」のしんぜんにきせいして
神「かみ」もをうらみ来りけるが神は悲「ひ」
祈をうけ給わずとやいわん人昌
のせんあくを知り給ふを神通「じんづう」
とや申さんと承給わる我父佐
佐木内膳どのを討ざる事は
明らかなりといへども二千余人の
その中にて多り出されて其罪「つみ」
なくして鼻首「きやうしゆ」せられし子「こ」の

(4 13ウ)

身としてなげかざらんやねがわくは
内膳どのを討たる者をしらしめ
給へ父の汚名「おめい」をすゞき度と申て
なげきあるひはうらみ神前「しんぜん」に
ひれふしてなげき祈「き」せいし
けるこそあはれなれなどが御神
にと此子の孝「かう」しんには御かふ受「しゆ」

ましまさん事か有べからず誠「まこと」
にまれなる孝しんにてかくいのり

(4 14才)

けるこそあはれなりときく人々
皆みな涙「なみ」だをもよふしいたみ
けり

物種真考記四終

(5 1才)

物種真考記卷五

目録

一 助六平等「へうとう」の森「もり」にて玉葉「くすり」をひろふ事

并 不破陰謀露見「いんほうろけん」逐天「ちくてん」の事

一 物種「ものくさ」新左衛門矢野内匠「やのたくみ」切腹「せつふく」の事

并 佐々木甚蔵敵「かたき」討出立の事

(5 2才)

物種真考記卷五

助六平等「ひらと」森「もり」にて玉葉入をひろふ事

并 不破陰謀「いんほう」ろけんちく天の事

水を折りて父があだを報「ほう」じ障子「せうじ」を

祈りて君の敵を討たるとむかしより

ためし有水は水神「すいじん」とて神なれば仇「あだ」と

かご有べき処なれど障子は家「か」ぐにして

奇徳「きどく」有べき物ならね共信心「しんく」いたる□□は

(5 2ウ)

奇特をあらわすましては是は助六信

をこらせし処なればなか神慮「しんりよ」に叶は

ざらんや助六は此日も久敷神の前「まへ」にな

げきいけるが又母もさこそ何わび給ふらん

とて神拝「しんはい」終「おは」りすぐくと森「もり」の下草「くさ」

ふみ分て立帰る思はずこなたを見れば

人のかゞみし跡有ていばらを折「おり」敷草を
折たる跡何心なく助六が目にきらつきて
鉄砲「てつほう」の玉薬「くすり」入落「おち」て有ければ助六おど

(5 3才)

ろき草「くさ」押分「おしわけ」てひろい上あやしき器物「きぶつ」の
落て有けるよと手に取上見るに金字「じ」
にて不破庸重「ふはつねしげ」とほりて有助六思わず
扱は是こそ神の加護「かご」にて罪「つみ」人の手がより
成らんと神をはいし嬉「うれ」しくも先我家
に帰りけり中瀬村百姓助六なぞ此度ひ
ろいし物村にては聞ざる名字「し」也然らば城内
の佐々木意趣「いしゆ」有侍一揆「き」に事よせ平等「ひらと」
の森よりねらいて討たりと覺たり然れ

(5 3ウ)

共百姓一揆「き」の折からゆへはおしくも我父をは
じめ四人ながら無実「むじつ」の罪「つみ」にしづみたり
是を城内へ持行せん義を願ひなば早そく
相しれる事も有べしと願書「しよ」をしたゝめ
懐「くわい」中から城下にいたり町奉行穂田「ほした」下
野守屋敷へ行玉薬「くすり」入をひろい候老父
此度罪なくして死刑「しけい」せられされば何とぞ
佐々木を討たる罪「つみ」人の御詮「せん」義共相成申べ
し且又佐々木殿の討れ給ひたる処は平「ひら」

(5 4才)

等「と」森の右手なればかた／＼あやしき一物
と助六直言「しきこん」を以て少しもいつわる事な
く言上す穂田「ほした」下野いさい聞て申されける
は一旦こと決断「けつたん」致したる事再度「さいと」是を
糺「たゞす」は法度「はつと」なれ共其ひろいし玉薬入
に不破庸重「ふわつねしげ」と有ばまさしく城内の不破
万左衛門が事なれば彼者私の意「い」しゆを
以て成たるもしれざれば吟味「きんみ」致し遣は
さんと有ければ助六大に悦び宜敷願ひ

(5 4ウ)

来ると我やへこそは帰りける穂田「ほした」下野は
いそぎ登城し此器「き」物を矢野内匠「やのたくみ」に

見せ此度罪「つみ」せられたる中瀬「せ」村助右衛門倅
助六父が死刑「しけい」を歎「なげ」き有処に是を平「ひら」
等「と」の森にてひろいたりと申出たり不破「ふわ」
庸重「つねしげ」といふ文字「もんじ」あれば万左衛門が事也
と申ければ内匠「たくみ」大におどろき定ていつぞ
や化「はけ」物をこしらへ物種を欺「あさむ」きしに内膳
に見とがめられ知行を召上られたることあれ

(5 5才)

ば其意趣に万左衛門内膳を一揆「き」にことよせ
討たりと見へたり然れ共かやうに百姓「せう」四人
を死刑「しけい」に行ひし事なれば此後不破「ふは」
は所為成事頭わるゝ時は我々がふ吟味
にて至せいばい致せしと殿様御帰国のせ
つ大に御とがめ有べし先内分にて不破
に尋ねみんと万左衛門をまねき密「ひそか」にたま
薬入を出し是を見しり給ふやかよふ
にして平等の森に落て有し□□

(5 5ウ)

万左衛門南無三宝「ぼう」ことろけんせしと□に
おどろき當惑「とうわく」せしが面を糺「たゞ」し誠に是
は先月殿「と」の様中瀬「せ」村へ小鷹狩「こたかかり」のおり
ふし平等の森にて取落したる玉薬
入夫を百姓「せう」等がとくにひろい置ながら
我父の死刑「しけい」に合たるかなしさに思い出し
此度ひろいしなどゝ此不破をざんし
たるものにて一わんと我あくじをつゝ
む弁舌空「べんせつそら」うそ吹て申ければさこそ

(5 6才)

にて候半とて其俣にてすましける万左衛門
はへん舌「せつ」を以て其場をのがれぬれ共斯ろ
けんせしうへは佐々木内膳が倅甚蔵此事を
聞ばむつかしく成やせんと後難「こうなん」を恐れ万事
は我が家へ帰ると其まゝ取物も取あへず旅
用の金子用いしてすくさま蓄天「ちくてん」致しける
こそ残念也既に此事一家「か」中に取きた致
しければ佐々木甚蔵大におどろき不破
万左衛門が処有成かと齒「は」をかねていかり恨「うらみ」

(5 6ウ)

けり斯とはしらず百姓四人無実「しつ」の死刑「しけい」
におこなわれしを敵討しと悦びしが
目前に有敵不破といふ事をいまだしら
ざるこそ口おしけれと狂気「けうき」のごとく早速
近辺「きんへん」方々を尋ぬれども不破が行衛一向
しれざればこは何とせん斯やと夫より寝
食をわすれて身をもがきほぞをかんで
いかりけるこそ道理「とうり」なり

(5 7オ)

物種新左衛門矢野内匠「やのたくみ」切腹「せつぷく」の事
并 佐々木甚蔵敵討に出立の事

去程に不破万左衛門は与板「よいた」の城下を立通
是にまかせて越後「ゑちご」とい川に至りける
が此他は我出生の地にしてしる人もあらん
かと思ひ爰に十日余り身をしのび夫より
京都へ心ざしけれども関「せき」か原合戦の折から
ゆへ浪「らう」人者は国群に関をすへて敵の間者「□□しや」

(5 7ウ)

とうたがひ思ふよふに通る事あたわず糸「いと」
魚「い」川の城下五里はなれ生駒「いこま」といふ村にい前
召遣ひし定助といふ中間の生国ゆへ此生
駒に身を忍びしづらく隠「かく」れ居たりける此時
関が原の一戦は石田三成が逆「きやく」心よりおこること
なれば終に石田□□等真ぼく致しければ

関東勢大に勝利へて徳川深君直
さま京都へ上洛有けるに上総介殿もともに
上洛有へき処なれども国元の一揆「き」騒「そう」どう

(5 8オ)

何角心元なく思召御父の深君「しんくん」の御いと
まをこひ給ひて関「せき」が原「はら」よりすぐさま本
国へ帰り然るに忠輝「たつてる」公既に御帰城あり
ければ諸士銘々此度の軍功「くんこう」を賞美「しやうび」し全
く常々武げいを好「この」ませ給ふゆへ今度の
御せうり天晴「あつはれ」也と君の御安泰「あんたい」を賀「か」し

奉る時に忠輝公仰せけるは不便成は佐々
木内膳が横死「わうし」也いよ／＼百姓の処為「しよい」成
かと仰の下より佐々木甚蔵願書を「さ」し

(5 8ウ)

出し父の敵不破万左衛門ちくてん仕り□何
とぞ敵討の御願ひ御聞とゞけ下し置れ
なば是より直「すぐ」に諸国をたづね敵討申込し
と思ひ込でも願ひける忠輝公おどろ
き給ひ内膳が横死「わうし」は一揆「き」のわざと聞し
に何ゆへ不破が所為成ぞと物種新左衛門
矢野内匠「たくみ」兩人を召てたゞし給へば内
匠ぜひなく中瀬村助六が玉葉入をひ
ろいしわけ万左衛門を糺「たゞ」しゝ処かやう／＼

(5 9オ)

弁舌を以て我々兩人をいつわりすぐ
さまちくてんいたし候といさゝ言上しける
忠輝公大にいからせ給ひ汝に我戦「せん」ぜうに
おもむく時當城のるす居に急度申付
置たるはかよふの善悪「せんあく」を糺「たゞ」すべき為
ならずや然るに不破は悪事「あくじ」吟味すべ
き処手ぬるくせしより不破を取にが
し百姓のしらざる者どもを罪「つみ」におこ
なひ無実「しつ」の罪の民を殺「ころ」せし事言語

(5 9ウ)

道断我をかるしむるに似たり物種とて
も其ごとく我目代「もくたい」として本国に帰りな
がら私に民「たみ」をがいせし事定めし両
人とも万左衛門よりまいないを受己「おの」が利
欲にまよひかゝる非道「ひとう」をなせし物なら
んにくき汝らが心中やと大にいからせ給ひ
ければ矢野物種我おちどにせん方なく
不破がほう悪「あく」をいきどふる外なく赤面「せきめん」
してぞ居たりける物種新左衛門は心早き

(5 10オ)

男にて今は申訳立かたく諸「もろ」はだぬぎ
刀「かたな」をぬくても見せずすぐさま腹「はら」へつき

たてければ矢野内匠もおくれじと同じ
く腹「はら」十文字に切兩人こへをそろへて
言上しけるは全く此度のそう動「どう」をしづめ
んため君の御帰陣「きじん」をまたずして百性を
罪「つみ」せしは一揆「き」への見せしめにして不破が
悪事「あくじ」をしらさるゆへ也然れ共万左衛門か
まいないを取百性をつみせしと仰下

(5 10ウ)

されたる君の御一言何とこたゆる詞「ことば」なし
よつて兩人覚なき誠「せい」心をあらわす也
決「けつ」して万左衛門ひいきの所為は是なし
かへども国乱「らん」をしづめんため百性をつみせ
しは我々がつみいかやう共此上は御けん
慮「りよ」下さるべしと切腹「せつぷく」しての申わけに
殿も不便「ひん」に思召給ひ夫より諸国へ下「け」
知をつたへ絵図「ゑず」をまわし万左衛門を吟
味仰付られる佐々木甚蔵は敵討の

(5 11オ)

願ひ不便「ひん」の事に思召れ御免仰付られ
ければ甚蔵有がたく御受申上溝口「みそくち」岡「おか」
平といふ若党「わかとう」一人供につれ敵不破が
行衛をたづね討んと住「すみ」なれし本国
を立出ける殿さまより旅「りよ」用として金
子三百匁下し置れければ甚蔵あり
がたく所領「りやう」し何国をあてといふ事もな
く与板「よいた」を立は目ざす敵は不破の関「せき」
伊勢路にこそはおもむきけり爰にのかれ

(5 11ウ)

成は矢野内匠物種新左衛門兩人既に
城内において切腹「せつぷく」し相はてければ兩人の
妻子「さいし」なげきかなしみける中にも物種
太郎は愚「おろか」成生れゆへ父のさいごを聞より
も大になげきかなしみ昼夜「ちうや」袖「そで」のかわく
ひまもなし何として父は此世をさりし
と母に取付ていたみけるこそ道理なり
聞人皆／＼涙をなかしける

(6 1才)

物種真考記卷六

目録

- 一 物種太郎母貞義「ていぎ」を守「まもり」自殺「じさつ」の事
并 太郎敵討を願ふ事
- 一 忠輝「たゝてる」公仁心太郎敵討首途「かとで」の事
并 不破万左衛門立身改名「りっしんかいめい」の事

(6 2才)

物種真考記卷六

物種母貞義を守て自殺「さつ」の事

并 太郎敵討をねがふ事

人本名ならず深恩「しんおん」をしると聖人も宣「のたま」へり至も成かる物種太郎父が最期「さいご」をなげきかなしみくらしける忠輝公も矢野物種不破が奸計「かんけい」によつて身のあやまりを生じ切腹したる事なれば是迄の

(6 2ウ)

ごとく物種太郎は御前をつとめよと父が禄をつがせ五百石あておこなふとて残るかたなき御仁「じん」心こそ有がたけれ物種太郎は是より毎日御前へ出勤「きん」して是迄のごとく愛「あい」せられる爰に物種が母は都倉「とくら」一角「かく」が妹「いもと」にして太郎三才の時つれて新左衛門へ再縁「さいゑん」いたしければ継父「けいふ」也然るにまさしく継父新左衛門不破が為にはかられ切腹「せつぷく」せし事なれば継父の敵也義理「ぎり」有中

(6 3才)

の父なれば太郎ぜひとも敵討に出べき所なれども元来柔弱「にうしやく」成生れ付他病「たへう」にして棒「ぼう」一本ふる事叶わぬといひ残に敵討といふ事も愚「く」どの太郎ゆへ出べき処為もなく只罰「はう」せらるゝゆへ出勤「きん」のみ致しける母是をなげきかなしみなさぬ

中の父ゆへ其子太郎敵も討ず父の名
禄相ぞくし悦び居るなどゝ人にいわれ
ては是皆はゝがなさず事よとうたがわ

(6 3ウ)

れんもかなしく去ながら太郎は柔弱「にうじやく」なり
とやせんかくやと女氣「ぎ」の此事を思ひくら
し何とか思ひ定めけん一書のうきおき
をしたゝめ太郎が出勤「きん」せし留守「るす」仏間
において自「し」がいてはてはてけるゝそ貞「てい」女
なれ家内大におどろき此よし太郎にしら
せば太郎は狂氣「けうき」のごとく立帰り見れば母
は刃「やいは」にふし朱「あけ」に成てたおれ居ければ
見るに心もうつゝなやとは何ゆへの御自「じ」

(6 4オ)

害ぞやと死たる母に取付すがり前後
もしらず泣「なき」けるがよふゝ書置を取出し
なみだながらひらき見れば
書置一通

其許どのことは三才の時母つれて当
家「け」へ再縁「さいゑん」し候事なれば父利
左衛門どには義理有中然るに
此度不破万左衛門が奸計「かんけい」にあたつて
切腹「ふく」せられたれば敵討にも出らる

(6 4ウ)

へき処なれ共元来病氣といひ柔「にう」
弱「しやく」なれば其事あたわず殿さまより
名禄相ぞく仰付られ当家を継「つぎ」本領「りやう」
安堵「と」せらるゝ事嬉「うれ」しく候得共継父「けいふ」の
敵なれば討には及ばすと母が欲「よく」に
心くらみ柔弱をいゝ立に敵をも
討さぬはなさぬ中の薄性「はくじやう」と人に
思われ候半かと母は夫新左衛門どのへ
殉死「しゆんし」して為はて申候全く夫の敵を

(6 5オ)

子に討せぬ母ならざること一家「か」中
の人ゝにしらしめんためにじゆん

死して祿の富貴「ふうき」をむさぼり
申さずよろしく心をさつし給に
るべしあな／＼かしこ

母

月日

物種太郎どのへ

母のかき置をよむとひとしく太郎あ

(6 5ウ)

つとばかりなきたをれいか成我は因果「いんくは」に
て世の人には生れおとりあほうに生れし
ことよ我だに人なみの者なれば敵討に出立
して母が殉死「しゆんし」は有まじきに世の義理とはいゝ
此物種が敵討に出ざるゆへ母がおしへて此家
の後の榮へをたのしむかとうたがわれん
ことを思ひ自「じ」がいとほなさけなや太郎も既
に廿五才是迄父母の御情「なさけ」一寸の孝「こう」をもな
さず先だてしは何事ぞや口おしや是に

(6 6オ)

付ても万左衛門其根元「こんげん」は奴「きやつ」ゆへと思へばにく
し腹「はら」立つやと一心に思ひつめむねにせま
つて昏「こん」ぜつし其儘「まま」ふしにけり家内いろ
／＼と太郎を呼生介抱「よびいけかいほう」してやう／＼
心を取なおさせ是とも帰らぬ事なれ
ば母の死がいを野辺「のべ」にこそは葬「ほうむ」りけり
斯て七日／＼のとむらいおこたらず忌「き」日を
特「とく」とおこなひ主従物種は忠輝「たごてる」公に敵
討の願書をさし出す忠輝公ひらき御らん

(6 6ウ)

有けるに元来我まゝにそだちしゆへ手跡「せき」
筆をも学はねば鳥「とり」の足形「あしかた」釘「くぎ」のおれを
見ることく落字「らくじ」まじりに書「かき」たるは何とそ
父の敵不破万左衛門を討度候へばしばらく
御暇「いとま」給わるべしと一句「く」の中にあわれを催す「もよぶ」
しへつらいなくして一しほあわれにぞ
聞へける忠輝公なみだをぬぐひ給ひ物
種太郎を呼出し尤も成願ひなれ共
元来なんじは柔弱「にうじやく」にして棒「ぼう」一本ふる

(6 7才)

ことあたわず殊に他病「たへう」の生れ付敵は名
にあふ万左衛門などか是を討事あたわん
や帰り討に出るやう成ものなれば此義は思
ひとゞまりて父が家とくを相続するが
汝が為には忠孝「ちうかう」の二道「どう」を守「まも」る処なれば此
義思ひとゞまるべしと御恵「めくみ」の御一言に太
郎は其儘「まゝ」なきたをれなさけなや我君「きみ」
さまさほどあなどり給ふこそつれなき
仰せ佐々木甚蔵には敵討をゆるされ

(6 7ウ)

いかなれば太郎には義理有父が敵を討
させて給はらぬと君を恨「うら」み身をくやみ
齒「は」の根「ね」よりは血「ち」を流「なが」しあたりの人々取
付何とぞ御取なしにて敵討の願ひ叶
ひ候やう頼み上ることあるひははいし又は
おがみ愚氣「おろかぎ」にたのむあわれさはなみだ
にむせばぬ人ぞなき

忠輝公仁心物種敵討首途「かどで」の事

(6 8才)

并 不破万左衛門立身改名「りつしんかいめい」の事

徳川上総介忠輝公は物種が願ひ置ことには
思召給ひけれども柔弱「にうしやく」の太郎ゆへ此義ゆる
し給はず然れ共太郎おして再三願ひに
れば不便に思召やゝ御なみだにくれ給ひし
がいかに物種よくも願ひたりけなげなり
さいふ事なれば介太刀「すけたち」を打そへ敵討に
出すべしと聞より頭をふり有がたき

(6 8ウ)

仰なれ共助太刀を頼み敵を討たりと人
にいわれては母の処為の叶わず只一人来
べし忠輝公かんじ給ひさすが武門の家
に生れし太郎かな明智の有者と常々「つねく」
あほふくとはづかしめしは我々こそはづ

かしけれとなみだをやゝおさへて金作「づくり」
の御さし添「そへ」手づからさし出し是は藤四郎
「吉」光の打たる銘作「めいさく」なれ共是を汝に
敵討の首途にせんべつ致すと仰られ

(6 9才)

ければ物種太郎はつと恐れ入有がたき
君の御慈悲邨「やが」て敵の首引さげめで
度拝顔「はいかん」仕らんと申ければ有がたく
も君よりかどでの御盃給はり金子三
百匁旅用として下されければ物種夫より
金子をはだに付伯父「おち」都倉「とくら」一角「かく」に家内「かない」
を預け我身ははる／＼行先もしらぬ
敵討に出ける供をつれさせんといへども
聞入らずたゝ一人出んと望みけるをよふ／＼

(6 9ウ)

太三郎といふ十三才に成けるを使ふて立
出ける是はひとへに助太刀としてもらいしと
人にわらわれんことを思ひて也一応に信智「しんち」
有とは是らの事をやいふべき也爰に不破
万左衛門は越後の生駒「いこま」に身をかくして
有けるが此処も与板にちかければ尋ね出
さんもしれずと思ひければ生駒の村を
出て道州「どうしゅう」に出夫より京都にそのぼり
ける此時京都「けうと」には徳川右大将家康公伏

(6 10才)

見城にまし／＼ければ諸国の大小名我も
／＼とあつまり繁昌「はんしやう」いわんかたなかり
けり（此時いまだ江戸はなく京大坂伏見殊の前賑けり）不破万左衛門京都
にいたりければかなたこなたとさまよい
けるに上京水火「すいくは」天神興正寺「こうしやうじ」の辺「へん」を
通りしに酒店「しゆてん」有たびのうさをはら
さんとして此酒屋に入酒をのみ居けるに
桐「きり」のとふのはんばんきたるやつこども三
四人ともに酒をのみ居る折から友達「ともだち」どし

(6 10ウ)

口論「かうろん」致し後にはつかみ合けるゆへ其中へ

わけ入双「そう」方をなだめあつかいやう／＼中なを
り致し又々酒をすゝめける一人の中間「げん」
申けるは其元「もと」はいづくの人ぞ万左衛門はこつ
食「じき」にも取入度身なれば拙者は多ちご浪「ろう」人
也よろしき事有ばたのみ入奉公の望「のぞ」み
有て此地へ参りたる者也やつことも手を
打て幸ひよき人にあふたり我らは福
嶋左衛門太夫正則「まさのり」どの御内之我々ごと

(6 11オ)

き中間奉公はいかにさいわい人たらず
してことをかきめいわくせり万左衛門
今は何処ともぞむ時なれば然らば
よろしくたのみ入といふよりして不破
をともなひ福嶋がやしきにつれ帰り
て改名「かいめい」し万介とていやしき奉公
をいたしける時に福嶋の嫡「ちや」男武蔵「むさし」
守正利「まさとし」公なる時北野「きたの」天満宮「まんくう」へさん
けい致されける使万助にやりを持「もた」せ

(6 11ウ)

十七八人しのびて参けいし給ふ折
ふし右近「うこん」の馬頂「ばし」にて慶州「けいしう」の浪「らう」人
樋口「ひぐち」瀬平といふ悪「あく」とうに出合けるが
福しまとはしらずしてのり物へ狼「ろう」ぜき
いたしければ近習五六人取てかゝると
いへども剛力「かうりき」にしてなげちらしけるを
見てやりをもつたる万助おどり出後「うしろ」に
引かづきまへゝなげ終に瀬平を
取てふせければ福しま正利「とし」大に悦

(6 12オ)

び給ひ天晴「あつはれ」万助がはたらきとて夫より
帰宅「きたく」し父正則「まさのり」にも此度いさいひろう
し給ひける万助を取立給ひ少し
の知行をあたへ給ひて武士と成是
よりして万助は有がたくてうだいし
悦び則改名「かいめい」して岩倉「いわくら」了輔「りやうすけ」と
こそは名のりけり

物種真考記六終

(7 1才)

物種真考記卷七

目録

一 佐々木主従「しうく」大阪にて敵を尋る事

并 不破宗兵衛人違「ちか」ひの事

一 物草太郎京都へ旅行「りよかう」の事

并 大津宿にて盗人「ぬすひと」を方便「たはかる」事

(7 2才)

物草真考記卷七

佐々木主従「しうく」大阪にて敵を尋る事

并 不破宗兵衛人違「ちが」ひの事

扱も不破万左衛門は福嶋方へ鎧持と

なり入込「こみ」しにはからずも武蔵守との

少野参詣「けい」の折がら樋口「ひくち」瀬平狼「ろう」ぜきに

合程にことに及ばんといたしける時

武蔵守殿の鎧を持居けるがなんを

(7 2ウ)

すくひ又瀬平を心よく生「いけ」どりけるゆへ

武蔵守どのはじめて其武術「ふじつ」を

かんじ御父左衛門太夫正則「まさのり」どのへ口ぐ

めて立身させ岩倉「いわくら」了輔「りやうすけ」と改名させ

五十石あたへられければ思わず万左衛門

立身して是より岩倉了輔と名の

り福嶋武蔵守家臣と成是より

してこうげんねいしよくをもつて

主人に取入へつらいける程について

(7 3才)

武蔵守のてう臣と成にけりこゝに

先達て不破がために討れたる佐々

木内膳が倅「せかれ」甚蔵并下人岡「おか」平本「こ

くゑちご」を出処々をさまよいいろく

たびのうきかんなんをしのぎ敵不破

を尋ぬれ共一向しれずいかさま京都

大坂は大小名のあつまる処なれば是へ
立こへ尋ねば不破居る事もあらんか
と大坂にこそ出にける主従「しうく」夫より

(7 3ウ)

神社仏閣「ふつかく」を謁見し人のあつまる
処は眼をくばり不破を尋ぬれども
一向しれずかれ是とする内慶長八年
となれどもいまだしれず此時徳川家
康公には征夷「せいゝ」將軍の位に登「のほ」らせ給ひ
大坂へ諸国の大小名参きん停止「てうじ」仰付
られ大坂の内大臣秀頼「ひてより」公には撰河「せつか」
泉「せん」の三国にて御蔵入百万石にさだめ
給ひける是によつて大坂は大にさび

(7 4オ)

かへりて京都守らはんじやしける然るに
家康公江戸表に城をきづき是に住「ちう」
し給ひければ京都に有大小名の屋
敷おふく関東「くわんとう」にうつりけり是によつ
て京都大坂とも殊の外さびしく成
けりされども佐々木主従は何ぶんにも
大坂城内に心残り思ひもしや万左衛門
城内に身をよせ居んかと伺「うかゞ」ひける
爰に又城内執事「しつじ」片桐「かたきり」東「と」市正且元「かつもと」が

(7 4ウ)

家臣不破宗兵衛といふ者有元来剛「こう」
気なる人にして武術「ぶじつ」をこのみけるが
常々此男あみがさをちやくして同
こうせり何ゆへなれば三年御前疾病「しつべう」
をやみて鼻「はな」をうしなひ人目も見ぐる
しく思ひて笠「かさ」をはなさずきて出ける
ある時座摩「ざま」の宮「みや」へ参詣いたし帰る
さに出入の魚屋に行合ける此時うを屋
五才ばかりの子供「こども」をおひて有けるが早

(7 5オ)

速軒「そくのき」につくばい不破が通るとおきより
てすなをはらいける時せにおふたる子「こ」た

つねけるはあれは誰「たれ」人にて候ぞや魚「うを」やこ
たへてあれは不破といふだんな也といゝ
て行過「ゆきすぎ」けり此時後より佐々木主従「しうく」立
聞して大に悦びもしや尋ぬる敵に
てはなきかと思ひ早速魚やを呼「よび」かへ
し其元今平ふくしられし旦那
といふは城内の侍「さむらい」ならずや魚屋是を

(7 5ウ)

聞いていかにも城内の侍不破宗兵衛といふ
人也岡平たづねけるは何ゆへあの侍ひは
笠「かさ」にて顔「かほ」をかくせしぞや魚やこたへて
あれはいつにても外へ出給ふ時は公用「かうよふ」に
てさへなければ笠を召歩行「あるき」給ふとか
たりける佐々木主従「しうく」は魚屋のいふを聞
て扱こそ不破万左衛門名を改「あらた」め城内
に居ると見へたり追「おつ」かけてとくと人相
を見んと兩人跡をしたひはしり追

(7 6オ)

付伺ひて横「よこ」を見むかふへまわりなり
見るに其まゝ万左衛門に似「に」て有只かほを
しらされば岡平いろくとしてのでき
見るにいよく相違「そうい」なし扱は万左衛門と
本町橋「はし」のうへにて甚蔵こへをかけてい
かに不破万左衛門父が敵やらんと申ければ
不破宗兵衛大におどろき立とまり我は
全く敵をもつたる覚なし人ちかひにて
有べしといふ岡平すゝみより人違「ちか」ひ

(7 6ウ)

とはひけふ千万先笠「かさ」をぬげといふ
まゝに岡平宗兵衛が笠を引取見れば
大きに相違し只あきれたるばかりなり
宗兵衛大にいかりて汝等にくきやつかな
徳「とく」と人を糺「たゞ」さずして我着「き」たる笠「かさ」を引
とりし事きつくわい也下人の身とし
て我に恥辱「ちしよく」をあたへたりとすぐに岡
平がもとゝりつかんで引よせ足「そつ」下に
ふまへさんくにてうちやくする甚蔵は

(7 7才)

おどろき全く兩人とも若年ゆへそこつ
致せしは時いくへにも御了「りよう」けん下さるべし
とわびけれども宗兵衛元来短慮「たんだりよ」ごう氣「き」
者ゆへ一向聞入らず甚蔵を同じくとらへ
兩人を下人にいひ付ててうちやく致し
ける然れども甚蔵岡平大もうある
身ゆへ手むかひせず存ぶんにうたれ
ける既に衣るいもそんじ手足「てあし」をどろ
によごし一向見ぐるしく成といへども

(7 7ウ)

只いきとふりをかくし居たりける宗兵衛
は存分てうちやくし今は心地よしとう
なづき城内へこそ帰りける程に佐々木主「しう」
従「しう」若氣「わかげ」のあやまりにはやまり不破万
左衛門と取ちがへ大にてうちやくせられけれ
ば無念のなみだ袖「そで」をうるほし我あや
まりゆへぜひなくも旅宿「りよしゆく」へこそは帰りける

物種太郎京都へ旅行「りよかう」の事

(7 8才)

并 大津宿屋にて盗「ぬす」人を方便「たばか」る事

爰に物種太郎休「としやす」は不破万左衛門を
討んとて本国ゑちごを立出いづくをさ
だめぬたひの事太郎とて十三歳になり
けるを弟のごとく本国にてう愛「あい」せし
者をつれたびの用意を藤「ふじ」ごふりに入て
せおひ先京都をさしてあゆみける
濃州「のうしう」関「せき」が原「はら」に來り見れば先年討死

(7 8ウ)

せし者の死がひ一つの塚「つか」にうづめ供花「かうけ」を
びたゝしく大そとばを立有ければ太郎
は思わす無常「むじやう」を勸「くわん」じいかさま武「ぶ」の家
程あさましきものはなし命は義によつ
ては塵「ちり」のごとし先達の合戦に討死せし

人は一墓「ほ」の内にうづめられ守名せし
人は其名をしられ討れし人はなにと
いふ名ともしられず只あさましく其
名を苔「こけ」の下にかくれけるこそ哀「あわ」れなれ

(7 9才)

持べき物は弓矢也と太郎は心しんして
かの薬師寺「やくしじ」治郎右衛門が口ずさみしも尤
と其夜は塚「つか」のもとに夜ごとゝもよ
称名「しょうめう」して討死せし人の追善「ついぜん」をいたし
けるこそやさしけれ其翌「よく」日京都をさし
てあゆみける

私曰関が原に物うき地藏「じぞう」とて「あら」
げる石仏「せきぶつ」也是は太郎父の敵を討「うつ」て
後出家し通園「つうゑん」と成てひたすら

(7 9ウ)

関が原の討死の塚「つか」をあわれみて
地藏を一体「たい」つくりて討死せし者
の後世「ごせ」のためにせきがはらへ宇治
より送「おく」る処也然るに後人あやまつ
て物種「ものくさ」地藏を今は物うき地藏
といふと見へたりくは敷ことは其
地の人に聞給へ

斯て物種太郎は京都をさしてのぼり
ける爰に此街道「かいとう」にて旅「りよ」人の金をかすめ

(7 10才)

取竹田茂平といふ者太郎がおふく旅銭
をたくわへ居る事をしり我も旅「りよ」人と
成て道つれとぞ成にける太郎は五百石も
領ぜし人のふところ子「ご」ゆへ一向かよふの悪「わる」
者とはしらずしてともに入こ人に致し
けるが宿「やど」も同じ処にとまり茂平は金を
伺「うかゝ」ひうばわんとすれどもはだ打がへ
に入て太郎はだをはなさず風呂など
へ行せり何かふといへども少しもゆだんせ

(7 10ウ)

せず茂平金をうばふ事あたわず終

に大津の宿にいたる迄得とらずむなく
既に大津にいたりければ太郎は京屋と
いふ宿にとまりければ蔵平も又此やと
にとまる太郎申は一樹「しゆ」のかけ一河「が」のな
がれとは申せども其元さまふと道づれ
に成入魂「こん」となり下され有がたく然るに
明日京都へこしかへば定めし今宵「こよひ」が
なごり成べし其元さまも定て御身

(7 11才)

事有て京へ御出と聞ばもはや今よひ
が御わかれとならん扱々是返有がたき御
かう恩「おん」に預りしと申ければ蔵平はさ
れば拙者も京都に用事あれども其
元さま京御見物とあれば我もともに
見物すべし太郎何ともふしぎに思ひ
居けるが臺「だい」処へ茶をこひに立出ける時
此家の亭主「ていしう」太郎にさゝやきけるは其元残
はさだめて田舎「いなか」人ゆへしり給ふまじ其元

(7 11ウ)

さま同居せられし人は此街道「かいとう」のぬす人竹
田蔵平といふ者也ゆだん有なとしらせ
ければ太郎はおどろきよくこそしらせ下さ
れし此間より道づれと成しかど心
得ぬ人と随分ゆだんせざりしによくぞ
や御しらせ忝なしと亭主「ていしう」に一礼し夫
より太郎はうらの庭「には」にて石「いし」をひろい紙「かみ」
につゝみて我打がへに入城の金は風呂敷
につゝみかくし置扱風呂の湯「ゆ」わきければ

(7 12才)

いつになくかのはだ打がへをはづして風
呂敷「ふるしき」につゝみし金手ぬぐひにまいて湯「ゆ」
に入に行「ゆく」ていにて立ければ竹田蔵平是を
見て大に悦び太郎をかつ手へ茶を取
にたのみける其跡「あと」にてかのはだ打がへを
そつと引上て見れば金子三百匁ほ
どの重さ也蔵平はやがて懐「くわい」中し
是なればこそ此間よりはたをはなさ

ぬもことはり是程の大金をもたれたる

(7 12ウ)

ゆへ也と思ひけるこそおろかなれさてく
よきもふけせしと思ひ用事「じ」をとゝのふ
かていにて立のきけるを太郎は障子「しようじ」の
やぶれよりのぞき見て手を打て大に
わらい扱々おろか成盗「ぬす」人かななかへつてあ
ざむかれはかられしこそおかしけれとて
すぐさま元の座敷になをりひとり
多みて居たりける頓て亭主「ていしう」を呼
出し先程貴公さまのおしらせをうけ

(7 13才)

給はりてよりかやうく致し置たれ
ばかのものはからずもそれととりて立
のきしといさぬ物がたりして亭主「ていしう」も
ろとも一興「けう」をもよふしたびのうさ
をはらしける

物種真考記七終

(8 1才)

物種真考記卷八

目録

- 一 物種太郎東坂本に閑居「かんきよ」の事
- 并 北野絵馬堂「ぬまとう」にて甚蔵に対面「たいめん」の事
- 一 千宗三芦屋釜「あしやかね」拝借の事
- 并 岩倉了輔「りようすけ」を欺く事

(8 2才)

物種真考記卷八

物種太郎東坂本に閑居「かんきよ」の事

并 北野絵馬堂「ぬまとう」にて甚蔵に合事

斯て物種太郎休「としやす」は宿の亭主「ていしう」にざしき
にてひそかに申けるはさてくおそろしき
ことかな既に旅銀を只今ぬす人にとられ
んといいたしたる事段々と申されければ

亭主三郎兵衛はよくもなされしもの

(8 2ウ)

かなきやつは竹田茂平とて此かいどう
にておふくの旅「かじ」人をたぶらかし金
銀をうばひ取候者也先夫はかくべつ

其元さまは何とやら私「わたくし」見覚えの有
御方也もしやゑちご与板「よいた」の御かたにては
御ぎなきやといふにぞ物種大きに

仰「けう」天しいかにも我は与板の家中也
われをよく見しりたる其方はいかなる
人ぞや亭主三郎兵衛さんくよく似「に」たる

(8 3オ)

人も有ものかなとさいぜんより思ひし
にたしかに其元さまの御名は物種太郎
さまとて愚「おろか」成生得成しが何として
只今斯御はつ明成ぞやといふ是を聞

ていよいよくおどろき其方はよく我をしり
たれ共手前一向しらずいか成ゆへぞやと
尋ねければ三郎兵衛申けるは私しは与板の
御城に田みのや善兵衛と申町人の倅「せがれ」
也五ヶ年以前処の神事に人をあやめ

(8 3ウ)

入牢「ろう」いたし既に一めいにも及ぶ処を父善
兵衛其元さまの御父新左衛門さま入こんゆへ
段々ねがひ新左衛門さまの御なさけにて

一命をゆるされ国元は追放「ついほう」夫より当地
へ立こへ此へんへ身をよせしが此家へ入むこ
と成今斯はん昌「じやう」するのもひとへに利左
衛門さまの御情「なさけ」にて一命たすかりしゆへ
也扱々うれしや本国のうわさも久しく
うけ給はらず新左衛門様にも定し御きげん

(8 4オ)

に御くらしなされん先は何角ゆるりと
今宵「よひ」は古今の御はなしうけ給はらん
扱くよき御方の御宿を申せしと殊
の外三郎兵衛は悦び夫より酒肴「かう」を出し

もてなしおくそともなく見へければ太郎
は心中に悦び我も京都を尋ぬるによ
き便りをもとめしとて心にうなづき
扱三郎兵衛とちかくまねき申けるは今こそ
一大事をかたるべし三ヶ年御前「わぜん」に

(8 4ウ)

不破万左衛門といふ者奸計「かんけい」をもつて百姓
に一揆「き」をおこさせ佐々木内膳を鉄「てつ」ほう
にて打殺し我罪「つみ」を百姓にゆづりける
を我父誠成と心得ぼう斗「けい」にあたりて
百姓を無実「しつ」のつみにおこない給ふ此つ
みによつて切腹せられしを我は元来
あほうにして少しも敵討の処為なかり
しを母「はは」自害「しがい」して敵討の事を我
にすゝめられしより初めて心付日比

(8 5才)

のあほうたちまちさめ今は本心になれ
り夫より殿さまへ敵討の願ひを立国
本を立出今当地迄さまよふも敵不破
を討んため也何とぞ是より其方も
とも／＼某がちからと成て万左衛門をさ
がし給はれと申ければ三郎兵衛大におど
ろきさて／＼思ひもよらぬ事をうけ
給はり候不破万左衛門がために御切腹「せつぷく」
とは残念至極「しんごく」此うへは御頼みにも及

(8 5ウ)

ばず命の親の新左衛門さまきつと信恩「しんおん」
はわすれざれば敵を討すべし御氣「き」を
遊ばする京都に身をよせ居んもは
かられず先是より私今のよふ父の隠「いん」
居は同国東坂本「さかもと」にかへば此隠居にかく
れ居てよう／＼京都へ万左衛門たづね
に出給ふべしとて其翌「よく」日彼東坂本
につれ行供三郎兩人を置其せわは
いわんかたぞなき情「なさけ」は人のためならず

(8 6才)

とは是らのことをやいふべけれ一旦新左衛門
が情を受し三郎兵衛返いたしけるもこと
わり也是より太郎は心よく東坂本に住「ちう」
し京都へよう／＼立出敵のゆくへ
をたづねけるが是ぞといふ事もなく
いろ／＼と心をつくしける此時又佐々
木甚蔵主従「しう／＼」は本町ばしにて城内
の侍ひ不破宗兵衛をとりちがへて大
にてうちやくにあふて後大坂には居ぬ

(8 6ウ)

と見へたり京都へのぼりせんぎせんと
夜ふねにて伏見につき夫より京に
いたり三条のはしづめ橋「はし」九兵衛かたに
旅宿「りよしゆく」して扱も京都を立よこ十文字「もんじ」
に吟味いたしける北野天神へさんけいし
主従「しう／＼」うろ／＼と人立のおふき中あるい
はばいやく人くんじゆの中をこと／＼く
敵は居ぬかと思まはし天神の下「しも」の森「もり」
より経堂「けうとう」の前を通影向「ようかう」松右近「うこん」のば

(8 7オ)

東むき観世音「くわんせおん」をはいしつゝ既に天神の
御べうにさんけいし後の社老「おひ」松の
其外末社西には朝日寺「あさひてら」連歌「れんが」どう
ふねの宮などへも参詣し絵馬「ゑま」どうの
前に出にけり此時物種も敵をたづね
北野天神は人立のおふきことなれば
とて太三郎をともしなひ来り絵馬堂
に来りしにおふくの絵馬の内に曾「そ」
我「か」兄弟の敵討のゑま有けるをつく

(8 7ウ)

／＼と打ながめ居ていにしへは斯部屋
住「ずみ」の身をもつてかまくらの大老城「ろうしよう」工「く」
藤「どう」太郎といふ大名を心よく討たる
ためしあればわれ／＼何ぜふ神仏の
加護「かご」をもつて敵万左衛門ことき者うち
侍ぬといふこと有べきやと思わず
絵馬「ゑま」に見とれてうつとり杖「つゝ」をつき

たゞみ居けるに佐々木主従「しうく」来りたがいに顔「かほ」見合せ是は珎「めつ」らしや物種どの

(8 8才)

ならずや甚蔵どのかとたがひにおどろき無事をたづね夫よりかたへの茶店「みせ」に立より佐々木甚蔵たづねけるは其元さまには公用にてもあつて当地へ来られし物成かと尋ねければ物種太郎申けるはいやそれがしはかやうくにて供に敵をたづぬる也斯たがいに對面「たいめん」いたすうへからは是より諸「もろ」ともにかたきをたづね討べき也其ゆへは其元「もと」討ても

(8 8ウ)

それがしむなしく思ふ也又われく敵を討ても其元がむねん成べし然らば是よりともに敵をねかわんとて物種は佐々木主従「しうく」をとみなひひがし坂本の閑居「かんきよ」につれ帰り是より三人いふくと身をつくし万左衛門がゆくへをたづねける

千宗三芦「あし」屋釜「かま」拝借「はいしやく」の事

(8 9才)

并 宗三岩倉了輔「いわくらりやうすけ」を欺「あざむ」く事爰に不破版左衛門は福嶋左衛門大夫正則「のり」が嫡「ちやく」男武蔵守が家従となれり五十石処領しけるが先達て將軍家康公江戸表にうつり給ひしせつ福嶋も江戸の金杖「かなすき」やしきを拝領して住ける然れども京都の下屋敷榎木「さはらぎ」町のやしきは其俣にさし置ける此時不破

(8 9ウ)

万左衛門は江戸表に主人武蔵守もろともかへりいたりけるが主人武蔵守けしからぬ茶道「さとう」をこのみ給ひ京都に有し

時に利休「りきう」がすへ宗三とともに毎日く
茶をたてたのしまれける折から芦「あし」屋
釜「かま」とて父正則「のり」先君「くん」太閤「たいかう」秀吉「ひてよし」公
より処領「りよう」せし茶器「ちやき」を京都より
江戸へ引こしのせつ江戸表へ尋ゆき
給ふべき処千宗三武蔵守にねがひ

(8 10才)

何とぞ此釜「かま」は父利休てう愛「あい」せられ
しをうけ給はれば此度江戸表へもち
行せ給ひなば又是にて茶をたて申
ことまれ成べし何とそしばらく拙者
に御恩借「おんしやく」の下されたしとねがひ宗三方
にとゞめ置ける武蔵守心よくゆるし給ひ
しが既に二年になれども宗三より
あしやがまへん却いたさざるゆへ武蔵
守殿再度「さいど」此釜を江戸表に取よせ

(8 10ウ)

度思ひ万左衛門をもつて急に京都へ
遣わしける万左衛門はいそぎ宗三宅「たく」へ
江戸表よりちやくせしゆへ宗三おくへ
請「せう」じ大きにもてなしていねいに
いたしける不破万左衛門宗三にむかひ此
度拙者上京いたせしは余の義にあら
ず先達て其元へ我君より恩借「おんしやく」
せられし芦「あし」屋がま是は太閤「かふ」秀吉公
より大殿「との」左衛門大夫正則「のり」公に給わり

(8 11才)

し御家の重宝「てうほう」なれども其許「もと」古「こ」
利休の事をしたひておんしやくせられ
し処主人心よく其元「もと」へあづけ置れ
し也然らば其後返弁「べん」有べき処に
今日迄返弁なきは主人をあざむくに
にたり何そ此度はぜひ拙者受取帰り
かやう仰付られたりとさもくわんたいに
のべにける宗三是を聞いかにも御□も
の仰せ承知仕候早そく御返弁いたす

(8 11ウ)

べき処に是迄ゑん引は私しふてう後
先／＼御酒一ツ御上り下さるべし遠路「ゑんろ」
の処御くろう何分今日御返弁仕ると申
釜の事をいふと珍味「ちんみ」ちんかうを出し
もてなしける万左衛門思わず大酒して
既に夕かたに成しかば千宗三うや／＼
しく芦屋釜「あしやかま」を桐「きり」の箱「はこ」に入れてもち
出る不破万左衛門は目もとろ／＼先
箱「はこ」より出し釜を改め箱「はこ」におさめ

(8 12オ)

万左衛門はまんすいをたすけひよろ／＼
と下やしき榎木町に帰りける斯て
万左衛門翌朝「よくてう」にいたり昨日「さくや」宗三よりうけ
取しあしや釜を取りだし見るにこは
いかに釜は二ツにわれて有ければ万左衛門
大に仰天し扱は宗三に欺「あざ」むかれしと
すぐさま真黒「まつくろ」に成て宗三が宅へおもむき
かやうなる物を我にあたへしは何事ぞや
誠の釜を出すべしと大きに立腹「りつぶく」いた

(8 12ウ)

しければ宗三仰天し全く其元を
欺むかず夜前其元さまとくとあらため
受とられし釜なれば何事はしらぬ事
何ゆへかゝる大切「せつ」の釜を受取ながら
かよふにそまつになして打わられし
ことこそ安からね其上我つみを人に
ゆづり誠に釜を出せよとは大きなる
悪言「あくけん」たゞし夜前とくとあらため手
を取られし釜此よふなわれ釜に仕「し」かへ

(8 13オ)

此宗三をこまらせ大金をむさぼる処為
か然らばなんじは福嶋の使者にはあるま
じ世の盗「ぬす」人成べしとかへつて宗三大
にいかり此うへは江戸へ立こへ此むね武蔵
守殿へ言上せんとさま／＼のゝしりければ
万左衛門も一旦あらため立帰りしあやまり

あれば何とせん家「か」もなくあきればて
たるばかりなり

曰此時不破万左衛門岩倉「いわくら」了輔と

(8 13ウ)

改名せり然れども夫にてはしれか

たきゆへ実名「しつめう」をあらわし書「かき」置
ものなり

物種真考記八終

(9 1才)

物種真考記卷九

目録

一 不破万左衛門京都を立退「たちの」く事

并 不破宇治槿「まき」の嶋「しま」へ隠「かく」るゝ事

一 甚蔵物種同道宇治巡見「しゆんけん」の事

并 下人岡平「おかへい」不破を見付る事

(9 2才)

物種真考記卷九

不破万左衛門京都を立退「たちの」事

并 不破宇治槿「まき」の嶋「しま」へ隠「かく」るゝ事

天の悪「にく」む処天からなす誅罰「ちうばつ」す万左
衛門はおのれが一旦悪計「あくけい」をもつて多「おふ」くの
民をくるしめ佐々木矢野物種の三人迄

既に奸計「かんけい」を以て殺「ころ」せし天此つみ
をなかゆるさんや我身福嶋「ふくしま」氏の用

(9 2ウ)

の有てくらしけるが芦屋「あしや」釜を受取

の役目をつとめはからずも千宗三が謀「ほう」

計にあたりかへつて盗「ぬす」人ならんとの悪「あく」

言「こん」をうけ大にいきどふるといへども夜

ぜん酒をすごしじゆくすいて茶「ちや」

器「き」の目利「めき」などしらざるゆへ何心なく

て釜を受取帰り其翌「よく」日やしきに

て見ればわれがま也何ともせん方なく

宗三が宅「たく」へ行此事をいふといへども中

(9 3才)

／＼聞入ず不破は大きに当わくして
然らば此釜には子細「しさい」ぞあらんと存じ
是は其元にしばらく預る也拙「せつ」者致し
やう有と万左衛門は釜を宗三にあづけ
置立出けれども何とせんかたなくたとへ
江戸表へ帰りたりとも短慮「たんりよ」の武蔵「むさし」守
殿よもや聞入られまじ殊にひいきの
宗三郎なればかへつて我罪「つみ」に落て切腹「せつぷく」
か手討に成べし斯なさけなき役目「やくめ」

(9 3ウ)

を受取我身のなんぎと成事ぜひも
なき次第也今無念也とて宗三を
殺「ころ」し我も切腹「せつぷく」すればいさぎよきに
似たれども我とても国元にて佐々木内
膳をころし今迄命のびる身が宗
三ごときの茶師「ちやし」の為に命をうしなわ
んも残念「さんねん」也此うへは此まゝにて当処を
立のき又よき主人をもとむべしと
心を決「けつ」し疵「きつ」もつ足になさけなきは

(9 4才)

我に理有ながら是をたゞさず此俣「まゝ」にて
京都を立退ける宗三は万左衛門を尋ぬ
れども行がたしれざれば大に悦び誠「まこと」の
芦「あし」屋釜「かま」はかくし置われたるにせ物の
釜を江戸表へもち行武蔵守殿の御前
に出岩倉「いわくら」了輔御使者に來られしゆへ
□御かまあらため有後し候然るに其
翌朝「よくてう」かやうの似物持來り誠の釜はか
くし置かへつて私しをいかり其うへ

(9 4ウ)

大金の無心を申かけ其後誠「まこと」の釜を
持立のき候よしいさゝる申上ければ武蔵
守どの大にいかりにくき岩倉「いわくら」がふるまい
かな我四海「しかい」の中をさがさせ尋ねいだし
ずんば有べからずと是より国々へ絵「ゑ」づ
をもつてたづねらるも千宗三はなんなく

武蔵守殿迄あざむき岩倉「いわくら」了輔を
つみにおとし我身は安々京都に帰
りける

(9 5才)

私曰千宗三此時福嶋の主器「しうき」芦「あし」
屋釜を我内にかくし置似「にせ」物をわ
たし使者をあざむき武蔵守殿
迄いつわりけりついに福嶋家「ふくしまけ」めつ
ぼうしけるが今にいたる迄宗三の
家の重宝「てうほう」と致しける宗三
宅は京二条本法院「ほんほういん」前の町にて
千宗三とて代々相続「ぞく」しける今に
置る迄此家に芦屋釜有くわし

(9 5ウ)

き事のかの家へ行てたづぬべし
不破万左衛門は京都を既にちくてんし
て我以前京都に有し時の朋友「ほうゆう」たる
者今は宇治のさとに獵「りやう」をなしくらし
けるが元は松平安芸「あき」守光政家「みつまさけ」の浪「ろう」
人真杖「ますぎ」弥平次とてかねて不破とは
入こん也夫ゆへ此かたへにげ行諸事「じ」を
頼みけるに弥平次も今こそいやしけ
れどいぜんは槍「やり」の一本もつかせし身ゆへ

(9 6才)

少しも出することなくかくまいける弥平
次いひけるは其元のなんぎは随分申訳「わけ」
も立べき事なれど其かわりには切「せつ」
腹「ふく」いたさねばならぬことなれば何ぶん
身をのがれかやうにふんべつし給へ幸「さいわ」
ひ此宇治の槓のしまは中々めつたに
人のしる処ならざる閑地「かんち」なれば心しづ
かに居給へと誠「まこと」に異「い」義なく申ければ
不破大に悦び是より槓「まき」のしまにぞ

(9 6ウ)

かくれける
物種佐々木同道「とうく」にて宇治巡見「じゆんけん」の事

并 下人岡平不破を見付る事

既に慶「けい」長辰の春の比佐々木甚蔵

岡平東坂本物ぐさが方に有て京都

のよふすを聞合せけれども中々不破

京都に有ともしれず然らばよしなき

処に長居はいらず定めて武州「ふしう」江戸

(9 7才)

近年はん昌なれば是よかくれ居んも

しれずと思ひ立物種佐々木主従「しうく」

是より東坂本の閑居「かんきよ」を□□三郎兵衛

にいとまをつげ東海道「とうかいとう」よりおもむかん

と思ひけるが太郎申けるは我々久敷京

都其外在辺「さいへん」めぐり敵を討ぬれども

いまだ宇治の里「さと」をめぐらず全くなぐ

さみにはあらねども伏見「ふしみ」より宇治を

まわり夫より当都へ出大和路「やまとじ」を伊勢

(9 7ウ)

へ参り江戸におもむかんはいかにと申

ける甚内いかやうともいづくをまわり敵

のゆくへをたづぬるためなればよろしく

計「はか」らい給へと先大津「つ」を追分「おいわけ」へ出伏見「ふしみ」は

さして行ふしみにて昼食「ちうじき」をいたし

ぶんごばし打わたりはるかに見れば宇

治のさとのけしきは外に一しほまさり

東には朝日「あさひ」山ふぐら堤「つゝみ」を南へと行ば川

瀬「せ」に飛千鳥「とふちとり」底「そこ」あをくゝに宇治川の流「ながれ」は

(9 8才)

いづくなみ奉行芦「あし」わけぶねにおどろきて

管「すけ」の庭「には」鳥さわぐなるおもへばむかし人丸

も此宇治川にてよめる歌に

武士「もののふ」の八十「やそ」宇治川の網代木「あじろぎ」に

さまよふ浪「なみ」の行来「ゆくへ」しらすも

誰が身のうへのゆへとでもしらくものは

嵐吹「あらしふく」うしろに見ゆる城山はいにしへ太閤「たいかう」

御在世「さいせ」の時は諸国の諸「こう」くん集して

(9 8ウ)

とみさかへしもすぎぬる五年の乱「らん」よりも
こと／＼く破却「はきやく」して今はさびしき峯「みね」
の松是を思へば皆人も身の盛「せい」すいも
うたかたやあわれむかしの物がたりはるか
に見ゆる音羽「おとは」山かすみにきへて後「あと」やさ
きかれ是長きふぐらづゝみもよふ／＼
に來り既にまきの嶋や名に橘「たちはな」の子「こ」
じまがさき梶原「かちわら」佐々木が先陣後陣「ちんごちん」
其名を今に立かゆみおなし苗字「めうじ」の

(9 9オ)

の甚蔵はいまだかたきをうたずして
斯さまよふはかなしやとともにあわれ
に物ぐさが宇治川の瀬を見てよめる
歌に

数「かず」ならぬ身を宇治川の網代木「あじろぎ」に
おふくの日をも返しつるかな

是より橋姫「はしひめ」の宮「みや」にまふで平等院「へうとういん」に
参詣し扇子「おふぎ」の芝「しば」釣殿「つりと」の「鳳凰堂」ほうわうどう「恵心」ゑしん

(9 9ウ)

僧都「そうづ」の作「つく」られし靈仏「れいぶつ」まつの見へたる
山崎「さき」あるひは山吹の瀬「せ」頼政「よりまさ」が墓「はか」夫
より縣「あがた」大明神にさんけいして何とぞ
かたきをはやく討させ給へと祈「いの」るより
外ぞなかりけり夫より宇治はしをわ
たり南をみれば十三重「ぢう」の塔「とう」せゞの網「あじ」
代「ろ」なみこへて橋「はし」をわたれば休息「きうそく」と為
茶店「ちやみせ」に立よりたばこくゆらせやすみ
居て四方「よも」の景色「けしき」ながめつゝしばらく

(9 10オ)

うさをはらしける爰に不破万左衛門は
宇治槇「まき」の嶋「しま」にかくれ居てすでに半年
にも成ければ人にはゞかる心もなく真杖「ますぎ」
弥平次と供に獵船「りやうせん」に打のりてあみを
もつて魚「うを」を取手なれぬ事もいつ
しかにおぼへて今は弥平次とゞもに

獵を手つだいあみを引我心にもおも
しろけれど悦びて南のかたより
船をこぎ来りしが佐々木が下人岡平「おかへい」

(9 10ウ)

は心おもしろく宇治はしのらんかんにも
たれ流「なが」れの水をながめ居ける処にこ
ぎ来る獵船「りやうせん」はしの下へ来りしがさつ
と吹「ふき」くる春風に万左衛門が笠「かさ」をふき取
てかさはなみにうかれける万左衛門大ひに
おどろき笠「かさ」をとらんとあせりける岡平「おかへい」
見るに日頃尋ぬる不破万左衛門也扱こそと
大ひに悦び主人に此よしを上げれば
佐々木甚蔵物ぐさ太郎もろともにはし

(9 11オ)

のうへよりとくと見てわれ／＼をしられ
ては隠「かく」るゝ事も有べしとあふぎをもつて
顔「かを」をかくしよく／＼見ればうたかひもなき
万左衛門に相違「い」なししかしながら船と橋「はし」
の上なれば何とせんかたあらざりけり甚蔵
ははや敵打の用意をなしすでに名のらん
といたしけるを物種大きに制「せい」してさ
やうにはやまる時はかならず仕「し」そんずる
こと有べしとかくあの船「ふね」を見へがくれ

(9 11ウ)

に付て行船のつきし処にて名のりかけ
勝負「せうぶ」せんせつかくめぐり合そこつして取
にがす事なかれかならず／＼せく事な
かれと下知をなしつゝみをつたひ船につ
れこぎつく処をもとめけるいづれに船に
つかぬかたはなけれどもあるひは在家「さいけ」に
へだゝり山にかくれ見うしなふ事も
有まことに廣「ひろ」き宇治川のゆくへもしら
ぬあみぶねに取魚「うを」よりも不破が身の

(9 12オ)

命はかなき我身とも万左衛門はしらずして
おもしろそふに魚「うを」を取川づたひにのぼ

りけるあやうかりしことども也此「用」はうれしくつゝみづたひにかげをかくししだひに行こそ嬉「うれ」しけれ

物種真考記九終

(10 1才)

物種真考記卷拾

目録

一 真杵「ますき」弥平次岡平に殺さるゝ事

并 物種太郎不破を生捕「いけとる」る事

一 物種佐々木敵討の事

并 宇治通園「つうゑん」茶屋由来「ゆらい」の事

(10 2才)

物種真考記卷拾

真杵弥平次岡平に殺「ころさ」るゝ事

并 物種太郎不破を生捕「いけとる」る事

去程に不破万左衛門はかくな事とはしらずして真杵弥平次とともに獵船「りやうせん」にて彼方此方とのりまはし十分にうを取ついに槓「まき」のしまの岸「きし」につきけれ

(10 2ウ)

ばふねを乱杭「らんくい」にくゝり付ひたいの汗をぬぐひつゝ船ぞこに置ける脇「わき」ざしを取

出して是を帯「たい」して船より何かの獵

具を弥平次とゝもに引かたげ堤「つゝみ」へ上る

を佐々木甚蔵下人岡平聲「こへ」をかけてい

かに不破万左衛門親の敵のかざしと立

ければ万左衛門思ひがけなく獵「りやう」づゝを投「なげ」すて扱はなんじらいまだ在命して

我を付ねらひしか顔露頭「ろけん」する

(10 3才)

くらは何をかつゝまんいで汝「なんじ」にかへり討にしてくれんと脇「わき」ざしをぬきはなせ

ば物種太郎後よりいかにめづらしや万

左衛門父の敵いぎ尋常に勝負「しよふ」を決「けつ」せよ万左衛門見てから／＼と打わらひうつけ太郎馬鹿「ばか」もの迄ともに敵呼「よば」わりとおかshやいでなんじら我を討てみよといひければ三方より一度「ど」に切てかゝる真杖「ますぎ」弥平次「かけより」

(10 3ウ)

助太刀御めん有と岡平に切てかゝる岡平心得真杖「ますぎ」を相手に火花「ひはな」をちらし戦ひける此時真杖が

帯「たい」せし山刀「かたな」あまり短「みじ」かきゆへあしらいかねてたゝよひければ岡平一かつ一せいで切入切先「なしか」はもつてたまらんや弥平次かたさきを切込「こま」れてた「ぢつ」く処を切たをし終にとゞめをさしにける是を見て万左衛門大にちからを

(10 4オ)

落し今は叶わじと足にまかせてにげて行比興「ひけう」也未練「みれん」者かへせ／＼とおつかくる万左衛門足を空「そら」にして所せんつつみにては叶わじとて川へぎんぶと跳込「とひこん」だり岡平すかさず我も川へとびこみ川中にて組「くみ」合水にしたがひ流れ行堤「つゝみ」のうへには物ぐさ佐々木只手をあげて聲か「へ」るばかりにしていたしやうもなく川中はちからにまかせ

(10 4ウ)

て上に成下になりたゞよふ処を物種手ばやく小柄「つか」をぬいて万左衛門が左のうでに手裏剣「しゆりけん」を打たりける万左衛門腕「うで」に手裏剣うたれなやみ力「ちから」よわる処を岡平むりに岸「きし」に引上たり甚蔵悦び父の敵を切らんとするを物種制「せい」していかにかたきなればとて水をおふく食「くら」ふてくるしむ病者「へうしや」は討れまじ討ともおもしろかるまじければ

(10 5才)

疵口をりやうじ命を助けて先あみのり物にのせ国元へつれ帰り其後明らか討なば名も正しくよろしからん先此まゝに引立よと刀「かたな」の下緒「さけを」にていましめ当処の代官所「たいくはんしよ」に三人とも立とへ此おもむきを達しける代官処は上総の介殿の御家来なれば龜末「そまつ」には成がたしとて代官三木伴「ばん」蔵先物種佐々木兩人より物にのせ不破万左

(10 5ウ)

衛門はあみのり物にて役人十人ばかりぜんごをかこみゑちこの国与板へおくりける時に与板ようやくしければ三木伴蔵すぐに登城して此おもむきを言上しければ太守忠輝「たゝてる」公はあまり久しく敵討のさたなきゆへ定めて物ぐさは柔弱「にうしやく」の生れなればかへり討にもなりしやと是のみあんし居給ひしに佐々木甚蔵にめ

(10 6才)

ぐり合無事に万左衛門を生とりて帰りし事大ひに悦び給て三人の者どもを召出し給ふ物種太郎佐々木甚蔵下人岡平皆地上にふしければ忠輝「たゝてる」公悦びのこへたかくよくも無事にてかへりしなまづ国郡「こくぐん」をさわがし諸士をがいしたる極悪「こくあく」人万左衛門をいけ取しとはあつはれ手がらなり吉日をゑら

(10 6ウ)

みあきらかに敵「かたき」をうたすべし汝等「なんじら」悦び退出し是迄のくろうをなぐさめよとて三人とも医師「いし」をつけられ病「やまい」の生ぜざるよふ仰付られける御厚性「かうせい」のほどそ有がたけれ其後三人「返」しゆつして不破「わ」万左衛門

を引出され大にいきなり給ひいかに
万左衛門なんじおふくの百姓をく
るしめあまつさへ四人を無成敗「せいはいひ」に

(10 7才)

させ其うへ佐々木内膳を未練「みれん」にも
飛道具「とびとうく」にて打殺「ころ」し我つみを
百姓にゆづり夫ゆへ矢野内匠「やのたくみ」物ぐさ
新左衛門切腹「せつぷく」せり大悪「あく」のなんじさか
礫「はりつけ」にもかくべきやつなれども佐々木物種
がのぞみにまかせ命はしばらく助け
置武士なみの敵討申付る也見の大
悦と思ひおらふとにくき奴「やつ」あれ打
ふせて腹「はら」いせと下知し給へば役「やく」人とも

(10 7ウ)

棒「ぼう」をもつて五十ばかり打たりける万左衛門
背「せ」をしたゝかうたれ皮肉「ひにく」やぶれさけ血「ち」
ながれ見るも心地よし是にて忠輝公は
いかりの余り毎日／＼せめさいなみ
給ひければ万左衛門一向ころさるゝこそ
ましならめ毎日攻「せめ」られ棒「ぼう」にてうたれ
身軀「しんたい」大につかれけるを佐々木物ぐさ
殿へ大になげき申けるは何とぞわれ
／＼本もう達する迄はかならずさよ

(10 8才)

ふの御せめは御無用になされ下さるべし
という／＼と申上げるゆへ其後は御せめ
のさたなかりけり

物種佐々木敵討の事

并 宇治通園「つうゑん」茶屋由来「ゆらい」の事

斯て慶長九年五月十日吉日也とて

与板「よいた」の城下に敵討の用意「い」有ければ

(10 8ウ)

かねて此よし隣国「りんこく」近在に聞へければ
老若男女群集「くんしゅう」なしける与板の長櫃「かぢ」町

のうら手に四十間に二十間のやらいをゆひそ
れ／＼にはからひ其日になれば中央「わう」
には徳川上総介忠輝「たゝてる」公家元本多
石見側用人梅津五平次鈴鹿「すゝか」安兵衛
宇治の代官三木伴蔵是は見物仰付られ
とうりうせり其

外我も／＼と一家中のものども
ほしのごとくかすみに似て我おと

(10 9オ)

らじと見物す此時廿一才ばかり
也女白帷子「しろかたびら」をもつてやく人へねがひ
けるは私しは不破万左衛門がむすめにて
候が先達て国を立ちのきしみぎり
より当国に捨られ只今はいやしき者の
つまと成てくらし候が然るに父万左
衛門が重罪「ちうさい」をゆるし給ひ敵討仰付
られしよし殿様の御はからひ有
がたく存候也是はせめて父が此世

(10 9ウ)

のおもび出敵討のはれぎにて「かへば」
是をあたへ給わらば有がたく候なりと
袖「そで」を顔「かほ」にあてゝ願ひけるやく人もふ
便「びん」に思ひ此よし聞とゞけ有てゆる
しければ白帷子「かたびら」たすき鉢巻「はちまき」まで
とゝのひ是を不破にあたへける親子
の中こそせつなけれ頓て敵討の
用意既「すで」にとゝのひければ東西より
拍子木「ふようしぎ」をもつて相図「づ」をせりやゝ

(10 10オ)

有て東の方より物種太郎利休「としやす」
佐々木甚蔵助太刀下人岡平の三人
白帷子「かたびら」に鉢巻「はちまき」太郎はやりをもつて
出れば甚蔵二尺五寸の太刀也西の方
より不破万左衛門御免を受て髪月代「かみさかやき」
して我娘「むすめ」の送「おく」りし死出のはれぎ
とてものがれぬ命なれば死物ぐるひ
にはたらき討死せんとおもひければ

勇氣いやまして立いづるまづ

(10 10ウ)

床机「せうぎ」にかゝりそれよりたいこをうち
ければ床机をはなれて先殿「との」へ
一礼して双「そう」方立むかへば物種佐々
木聲をかけて年来の意趣「いしゆ」思ひ
しれといひもあへず立むかふ不破
万左衛門大にわらひ一度死して二度死
なず此不破我一人をもつておふく
のものをころしたれば所せん
のがれぬとかねて覚悟「かく」せし処なり

(10 11オ)

不便やなんじらも我為に死出の案内
させんとあく迄廣言「かうけん」し刀を抜「ぬい」て
左右に佐々木物種を引受て中央「わう」
に立けるが物ぐさいかつて突込「つきこむ」鏝をそ
つしと受て甚蔵が太刀を受ながし
かつし／＼と上段下段二人を打手に
少しもひるまず万左衛門死物ぐるひ
にはたらくにぞ何とかしけん佐々木
甚蔵一ヶ所きずを受ければ是に

(10 11ウ)

氣を得て万左衛門はめつたむしやうに
なぐり切さしもの物種鏝を打落「おと」さ
れ飛「とひ」しざりて刀をぬき又さん／＼
に戦ひけるはあやうかりしことゞもなり
既に息「いき」もくるしげに見へければ鐘「かね」を
ならして双「そう」方休息「きうそく」し又茶をあた
へ氣「き」をやしなひ再度太鼓「たいこ」をすゝめ
しに物種大ひにゆう氣をはげま
しむかふと其儘「まゝ」討入ける太刀万左

(10 12オ)

衛門が真向「まつかう」に切付れば眼に血流「ちなが」れ
入てめくら「み」佐々木甚蔵又付入て
腰「こし」のつがひを切はなす物種も礼に
付入ついに万左衛門をふみたをしとゞ

めの刀「かたな」をさし返し返し父の敵思ひしれ
と名のりければ岡平もともに立
いて主人の敵を切付て目出度
かたきは討おさめたり忠輝「たゝてる」公大
ひに御ほめ遊ばされ後「あと」は出かしたり

(10 12ウ)

しのこへより外はなかりける斯て
城内へ御帰り有て三人を召出し
佐々木甚蔵は内膳と改名し二百
石加増「かそご」して七百石あておこなひ給ふ
物種太郎は三百石加増にて八百石に
なされければ太郎有がたきよしを
言上し其のち申けるは何とぞ私「わたくし」
の家「か」とくは是なる岡平に遣はされ
て又太三郎此兩人に物種の名「じ」を

(10 13オ)

あたへられ下さるべしわたくし
もちろん敵だに討候わじ出家の身
と成父母又は不破がぼだいおもとむら
ひたく候とすぐに御前にてもと
どりを切はらひ通園「つうゑん」と改「かい」名し
ければ忠輝公大に其廣大「こうたい」なる
志しをかんじ給ひ岡平太三郎
を兄弟となし三百石づゝ給わり
残り百石は通園が隠居料「いんきよりやう」とせ

(10 13ウ)

よとありしかば有がたく受来り
夫より佐々木物ぐさ跡しき栄「さか」
へて当家「け」の忠従と也ければ通園「つうゑん」
は敵を見つけし処は宇治殊に
我このむ茶は宇治よければとて
是より宇治にいたりはしのもと
に茶をたてゝ往来「わうらい」の旅人「りよしん」に父
母のため又は不破其外人びとの
ぼたいの為にせつたいしけるが終「つい」に

(10 14オ)

通園「つうゑん」有はて後も今に通園茶
屋とて宇治のはしの本に名を
残しける後世にゑい名をのこす
しるし成べし

物種真考記拾大尾

*『物種真考記』翻刻にあたり、快く許可して下さい酒田市立光丘文庫に厚く御礼申し
上げます。